

知れきつてゐるに鶺鴒馬鹿なヤツ
口説く奴邊り見い／＼側へ寄り
皆滑稽化して少しも悪感を與へぬ所に、川柳の川柳
たる長所を見認めるので、これを履違へて後世只淫
猥の句を詠むを、川柳と思つて無暗に實感的猥褻の
句を作出したので、天保の前後よりして大墮落に及
んだものである、ソコで此コロツケの句の如き寫生
主義と云はれたが、寫生ではない、馬糞といふもの
を、主觀にコロツケに見立ので、主觀の句で客觀の
句ではない、寫生といふ以上には少なくとも客觀的で
なければならぬ

蓮ッ葉を被ツてセナア釣を垂れ 天 綠

これらを寫生的と小子は信じてゐる

又同氏の著「新柳樽」に、理屈の句として排斥した

冷飯はマジナフやうに茶をかける

これを理屈とした理由が分らぬ、マジナフやうとい
ふ形容で、少しも理屈は含んで居らぬ、ソレよりは
同氏の撰んだ「川柳名句選」に大理屈の句が多い、
今ソレを一寸指摘して見ると

浮草は歌でも居所落付かず

でももの二字理屈を含めり、全體の趣向理屈より成立
す

稻の穂が寐ると百姓高枕
大理屈なり、云ふに足らず、其他

此頃の娘の扁は才なり

善く結へば悪く云はるゝ後家の髪

有名な句なれど全然理屈なり、文藝的價值なし、又

泣くよりもあはれ捨子の笑ひ顔

これも理屈、よりの三字も理屈を含めり、此他理
屈にあらねど駄句の極は

禪の脱がれたやうな宮の鈴

昔から碁盤の臍は四角也

ほゝづきは根をちされると血の涙

人參の白あえ雪の赤合羽

嫁應舉姑狙仙て家がもめ

等で、此撰者が折角此書を作られたにしては惜むべき欠點である、シカシさすがに古句を集めた丈「新柳樽」などより遙に参考とする價值があるから、此書をも古書の繙刻少なき時、進んで諸君にも披露して置く、又同書の終に樂齋氏の句があるが、前のエロツケ的の句を除いて先づ大した欠點もないが、中に

食券を握ると紳士猿眼

の句がある、これを小子は

食券を握る紳士の皿眼
と直したが、此と字トの字の違で、前者は理屈に陥り、後者は寫生の句となるので、正岡子規子が俳句や短歌の如き、短詩形の韻文は一字一句でも忽にしてはならぬと云はれたが、川柳でも一字一句を忽にしてはならぬ、又投句中に

お茶の水のあたりは地獄も袴穿き

の句があつた、全然理屈の句で、分けても字大理屈の存する所である、主観の句で、も、さへ、だに、まで、よりの助詞は多く理屈である、同じも字でも客観で、古句に

大門を鷹もジロリと見て通り

のも字は一句の字眼で、少しも理屈にならぬ、混同してはいかぬ（四代川柳の、夜學に更けて埋火も螢程のもは主観の句で大理屈）
又社中の句に

初裕キリ、と帯の締め心地

と云ふがある、これは全然月並俳句で、川柳ではない、題が己に季があつて俳句の題目であるから、どうしても月並俳句に陥る患がある、余嘗て

初給捕虜氣の利かぬ腕組し

と咏んだが、少しは川柳化してゐやうと思はれる、

大門を鷹もジロリと見て通り
のも字は一句の字眼で、少しも理屈にならぬ、混同してはいかぬ（四代川柳の、夜學に更けて埋火も螢程のもは主観の句で大理屈）
又社中の句に
初裕キリ、と帯の締め心地
と云ふがある、これは全然月並俳句で、川柳ではない、題が己に季があつて俳句の題目であるから、どうしても月並俳句に陥る患がある、余嘗て
初給捕虜氣の利かぬ腕組し
と咏んだが、少しは川柳化してゐやうと思はれる、

どうか川柳畑から、月並發句の境内に立到らぬやうに、注意して貰ひたい。尙文法の事や其他に論ずべきこと多々なれど、別に稿を起して、一々句例を掲げ批評を精細に試みるともあらう、雑誌でも發行する運びにもなれば、十分説明して、明りに他の非點を擧げ、救濟の道を盡さぬ無責任の言論を弄する者でないことを知らせやうと思ふ。

(川柳講壇終)

川柳久良岐點

自序

江戸ツ子クヤ／＼の薩摩辯を弄して、權威の前に服従すれば、田舎者ペランメーを學んで、神田の兄イを氣取る、有爲轉變は世の習ひと大分古臭く感ずるワケならねど、お江戸のチャキ／＼神田の兄イさんが、天下一流の川柳點、そいつを僅か百年の後には、然り而して屁の玉を喰ふやうな、勤番的青年が、漢文崩しの川柳とか云ふもの、大流行の世となりて、「カハヤナギちふもん、ダブおもしろゴワンナ」と歡迎され、露骨、淺薄、クスグリ、當込み何でもございと、ゲタ／＼笑ひの響き傳へて四境に達す、ヤト

ラ目出度い君が代に、逸民の病叟、獨り奮然として
 衾を蹴り、ヤツキになつてペラポーメ、土臭せえに
 も程があらア、マア其天狗は暫らく置いてお呉んな
 せえ、おいらも矢鱈にカビ臭せい天保親父のこわ色
 で、昔々と云ふぢやアねえが、韻文と云ふものに、
 大切な餘韻もなく、穿ちもない川柳はちツと耳喧ま
 しくて安眠妨害、洒落の一つも器用に云へもしねえ
 のに、ソウ川柳々々を振まくことは眞ッ平御免と、
 こゝに禪家の三十棒、一寸拜借な仕つて、カラ／＼
 喝ツ、ホイこれは新題派の假色ダツケ、ハ、ハ、ハ、ハ、
 ハ、ハ、ハ、

明治甲辰秋九月

武藏江戸の住

藤原入道久良岐敬白

左の一篇は稚きに川柳梗概を著したる時第一着に反響を興
 へられたる白墨生の書翰なり、掲げて以て序に加ふ

拜啓未だ拜眉の榮を得ず候得共、兼て日本新聞紙上に於いて、
 熱心なる好角家として、且又新派川柳の唱道者として深く欣慕
 仕居候、此度は又貴著川柳梗概拜讀の幸を得、爲斯道一段の光
 輝を發揚せられ候段、吾黨の士が嘆賞措く能はざる所に候、別
 紙の草稿愚見かいつけ差出申候、之は決して先生の御参考と爲
 す譯には無之、唯先生の宗旨に心を寄する末派の世にある事を、
 御知らせ申さん證左としての業に御坐候、昨日紙上にて承り候
 へば、神經衰弱とやらんにて、御引籠の由、何卒折角御加養爲
 斯道御奮勵、ハイカラ退治に従事被遊度く深く囑望仕居候頓首

明治卅六年十月八日

於四谷 白墨生

時事の拙句

野蠻の業であるのであると三郎
刺客と聞いて夫人は直ぐに琴を出し

顛蓋子は吾社の幹事として尤忠實力を斯道の擴張に盡さる、
今岡山第六高等學校に在り、本書を金色社に紹介して出版せ
しめたるは、余く同子の力に成る一言謝意を表し候、近頃子
寫真を寄せて一句あり

參らする杯と云はれた貌でなし

余これに答へて

制服でブレソエツソルは凄いな

例言

一、此篇もと新柳樽と題したるを、世に逸早く同
名の書刊行せられたれば、改めて『川柳久良岐
點』とは名付たり

一、分類は研究には便利なれど、同題の下に同じ
やうな句を多く列ねたるは、娛樂的に讀む者を
して、單調の感を抱かしむるを以て、古の柳樽
の如く、錯雜なる所に、趣味の變化を求めしめ
んとして、ソザと分類せず

一、句を讀みて意味の通ずる者は、別に題を掲げ
ず、題と相待つて趣味を覺ゆる者には、題を記

入することゝせり

一、主観の句は入るに易きも、實は惡口に流れ、眞の輕妙の域に到るは難し、故に斯篇、客観の句を主として集めたる所以なり

一、形式の變化、寫生趣味の發揮、連作の先鞭等は、古川柳に稀なる點なりとす

一、淫猥、露骨、淺薄の句は悉く省けり、以つて家庭の伴侶として羞ぢざる者あらんか、但初學の人多ければ、内容を主とし、形式に於て至らざる者、凡句庸作まゝ、無きにしもあらず、悉く點を辛くしては、十頁内外にて終らん、ソレで

は一向アツケなければ、多少枯木も山の管法を應用せり、ソコは大目に願ひ度し

明治甲辰秋九月廿三日

初代川柳忌日

川柳居主人久良岐記

自贊

久良岐

先生と云はれる馬鹿に久良岐成り
 ○川柳に久良岐はやつと尻を据ゑ
 七八釜しい親治様だと誰か云ひ
 江戸ツ子は先祖にすまぬ句は咏ま
 少々は土臭いナァと云はれ
 川柳いつも土鱈は下に居ず
 川柳跡の芽生へをござらうじろ
 かう言ふも皆子規先生のおん仕込

川柳久良岐點

川柳久良岐點

○哥薩克は曲馬の一手やツて逃げ
 ㊦ 久良岐
 ㊦ 黒鳩は目ばかりピカリくさせ
 ㊦ 同
 ㊦ 能々厄介な湖水だとロシヤこぼし
 ㊦ 同
 ㊦ 龍宮へドリヤ、マカロフと沈没し
 ㊦ 同
 ㊦ 商船にかけては露艦無敵なり
 ㊦ 同
 ㊦ 日艦見えずヤ子のサツと露艦出で
 ㊦ 同
 ㊦ 港へは整々堂々として逃げ歸り
 ㊦ 同
 ㊦ 遠路の所御苦勞にも負けに来る
 ㊦ 同
 ㊦ 御辭節と遠慮する中花が散り
 ㊦ 同

川柳久良岐点

鍾爐様今年はロシアを捕まへる 同
 ベランメー此ロシアメと直撲り 同
 土臭い教師綿チル剃ぎたがり 同
 又やられたと跋ひさく露艦逃げ 同
 火から目が出たよと露艦鉢合せ 同
 兵隊に先づロシアでは引導し 同
 軍國千字文蕪沈時局露探節約 同
 田舎式部風呂に一丁這入らんばい 同
 ○品のよい式部自轉車からヒラリ降り 同
 あらよくツてよを先立て、式部くる 同
 海老茶式部紫紺式部に紺式部 同

川柳久良岐点

お茶ツビ、焦茶式部と申しけり 同
 それつらく、惟みるに式部は土臭し、 同
 げんざんに露艦名乗も揚げずに來 宇
 草分の五月人形は鼻が、缺け、 三日坊
 日曜が來ると番頭髯を剃り、 同
 御臺場へ上陸しろと汐干船、 同
 ○名の困る時に妻の名文士書き、 同
 砲彈の洗禮露兵やけどをし、 北山子
 所得調査檢使のお入りといふ工合、 久良岐
 調査員一坪いくらで貸すといひ、 同
 所得調査明家だらけて力味まれず、 同

川柳 久良 岐点

家賃をくれませんかから無所得です 同
 戦争がすむまで大家苦しい顔 同
 教會は由來海老茶の好く所 同
 令して曰く我海軍の目的は商船にあり 同
 弱い者いぢめはロシヤの國是也 同
 ○マカロフはあぶないものにけつまづき 同
 これからは己の番だと摩耶勇み 同
 戦時書報露兵強姦の圖は掲げ兼 同
 節約する許り軍資に献納するでもなし 同
 しめ過てこいつ弱つたと亦ゆるめ 同
 裸ではならぬと書端書禁止なり 同
 春 雨

川柳 久良 岐点

賄賂丈取つて馬賊は首をふり 三日坊
 仁川で伊藤の持病さしあこり 同
 都々一の指名點呼は恐れ入り 同
 新聞の法螺が露帝の御意に入り 同
 二八誰が家の女ど立小便 久良岐
 素人義太夫三面記者太夫も見え 同
 唸る事牛の如しとかけていひ 同
 の童謡に曰く日本勝つたいロシヤ負た 同
 大捷の號外雨中を慕進し 三日坊
 電車満員いろくの腕ぶら下り 同
 哥薩克と馬賊好取組の初日也 同

点 岐 良 久 柳 川

遼陽がギリギリ 哈爾濱が結着 同
 靈鷹になれと若鷹はなちやり 湖
 千早城以來黃禍はまだ聞かず 久
 ナアに初期の戦敗位と瘠我慢 同
 黒鳩の鼻一二寸曲りかけ 同
 眼のくらむ迄喰はせろと追撃し 同
 イヤ強い何のと云ってト物語り 同
 来る手紙毎に差出人の名が違ひ 啞
 無線電信蓋し海老茶の創意なり 同
 親の詰問式部の答馴れたもの 同
 爺の新智識マカロンクロバトアキレンシフ 字
 岐

点 岐 良 久 柳 川

黒鳩は乗馬に泡をかませて來 久
 物共續けと捨鞭で鳩急ぎ 同
 鳩の面目何を以てた、んやとイキリ立ち 同
 アツと云ふ感嘆地球を一廻り 同
 〇へボ軍歌斬れ、と何を斬る？ 同
 到底修獲の見込なし南無アスコルド 同
 或る確なる筋とは知らずどんな筋？ 同
 最後の秘策捕虜で日本を喰仆ふせ 同
 オイ魯介圖に乗てそらバックつくな 同
 どれで米を禁制品にしをツたと兵站部 同
 提灯が鉢合せする二重橋 三
 日坊

川柳久良岐点

カンテラが禁止提灯浮かれ出し 同
 提灯の中にカンテラ蹲踞んでゐ 同
 萬歳の時に提灯目をまわし 同
 キュービット矢の拂底に度々弱り 政 女
 式部の裁縫波動形計出來 啞 蟬 坊
 ポンチ繪の日本段々でかくなり 久 良 岐
 國家を出しに兵隊に入りあげる 同
 招魂社二個軍團の人出なり 同
 抜自ない香具師早速鷺を飼ひ 同
 オ、寒い成る程これがシャツ着雨 同
 白旗のぐるりに露兵うづくまり 吞 吐 坊

川柳久良岐点

乙媛は畫伯の手帖おとり寄せ 同
 號外や己が手柄のやうに賣り 啞 竿 棒
 鉢巻に國旗をたてる號外や 三 日 坊
 コリヤ溜らぬとベゾテラベをかき 英 人 プ 氏
 新版の地圖旅順湖と訂正し 青 面 金 剛
 ロハで見る角力は押すなく也 美 甘 生
 アレキシフ先づ如才なく出發し 久 良 岐
 提灯屋九段に足を向けて寝ず 同
 提灯屋釣鐘程の金をため 同
 萬歳々々大萬歳めちやく萬歳萬々歳!!! 同
 藻の中でアラヨクツテヨと蝦は跳 岐 陽 子

川 柳 久 良 岐 点

普蘭店どうだコイツと咽喉を締め 久良岐
 號外を賣ると逃出すやうに駆け 吞吐坊
 初裕やられたなど、風邪をひき 三日坊
 初裕捕虜氣の利かぬ腕組みし 久良岐
 ロシヤで儲かるは祈禱の坊主也 呼子鳥
 遊ぶ時だけ大國民の襟度なり 久良岐
 ロシヤでは地震雷火事日本 臺灣坊
 白張の提灯行列あはれなり 久良岐
 ある地點こゝだと地圖が傷を受け 三日坊
 卒業の間近い式部おちつかず 啞蟬坊
 女義太夫餘りもがいて櫛が飛び 三日坊

川 柳 久 良 岐 点

メリヤスの未だ棧敷をじろくし 吞吐坊
 合の手で女義太夫びんをかき 三日坊
 島田鬻拍手の中に泣きくづし 吞吐坊
 女義太夫樂屋で猫をじやらしてゐ 三日坊
 素人になつても兎角胴間聲 久良岐
 元々が人の國だと仰せられ 啞竿棒
 白旗を掲げて一同墓の如くなり 松綠園
 黒鳩はまめでゐるかと御たづね 金増
 序幕から露兵七度び生かはり 吞吐坊
 せがまれて乳母は木馬に一寸乗り 同
 改良劍舞矢鱈にピカリくさせ 同

川柳久良岐点

助太刀も度々抜かけて賣付ける 同
 十二階脚下遙かにポーン 同
 貸しながら鬼とは一寸合はぬやつ 同
 商戦の下手がロシヤの付目なり 久良岐
 實業のふんどしジタイ緩いなり 同
 社會主義居酒屋ばかり歩いてる 啞蟬坊
 柵形をこはせと飛んだ飛ツ汁 三日坊
 提灯の無事天祐様と母はいひ 同
 高利貸カパンを腕へすぐ通し 同
 高利貸不在と聞いて便所借り 同
 高利貸何所へと聞けばマア運動 同

川柳久良岐点

人間と云はれたくない高利貸 同
 葬式は道惡へ来て列がわれ 同
 アレキシフ哈爾賓へ来て首をなで 春雨
 提灯行列出かけると女房切火うち 吞吐坊
 角力まで西方今年不振なり 久良岐
 旅順口探海燈行列負けずにし 同
 ハテ是非に及ばぬと露艦切腹し 同
 序幕將軍夜會場大詰露艦自滅場 同
 戦勝に酔ふなと天のあいましめ 同
 提灯行列シレから小田原になりたがり 同
 時節柄見世物までが武装なり 啞蟬坊

川柳久良岐点

半玉めラブと云ふ字を知ツて、よ
 同
 號外や三人組が賣れるなり
 久良岐
 りんの音で自然新聞を聞分ける
 同
 號外と呼ばれ其次が何新聞だ
 同
 慾張つて宿場馬のやうに鈴を付
 同
 へボ號外軍氣兎角に沮喪する
 同
 號外は顔馴染より聲馴染
 吞吐坊
 號外やヤット寐た兒を鳴り起し
 三日坊
 號外や店頭坐睡ガバと覺め
 同
 號外や號外賣へ角で賣り
 同
 號外や口程でない足はこび
 同

川柳久良岐点

號外や一丁行つて帯をしめ
 同
 號外を錢より早く見て終まひ
 同
 スタンレゝ地獄探檢思ひ立ち
 幻怪坊
 其から後警視馬術を獎勵し
 同
 人生騎馬巡查となる勿れト悄氣
 同
 カンテラ行列鼻の穴が一苦勞
 同
 騒ぎやはるからナトと贅六嚙をし
 同
 交番の中で酔どれ高いびき
 三日坊
 銀行員四時すぎ迄は札の中
 同
 葬式に看護婦丈けは車なり
 同
 自轉車で借のある前走りぬけ
 同

川柳久良岐点

連勝て國旗係りを拜命し 岐陽子
 燕子花式部の髪に萎れてる 同
 宿直の學校寢られぬでチト弱り 久良岐
 小使は又開門かと欠伸をし 同
 川勝柳吉川柳の二字で記憶され 同
 提灯の山見物の山下駄の山 美甘生
 本當よ抔と不本當式部云ひ 啞竿棒
 看々の九連城は急破急です 臺灣坊
 經濟科の講師切賣上手なり 啞蟬坊
 平民は兎角價を聞きながら 古雪
 アライしわpureなのよと得意なり 九里品

川柳久良岐点

瀛關車へソレ焚けヤレ焚けと必死也 久良岐
 綱帶を巻いて總督唸なツて見 同
 己れなどは死人の真似もしたと鳩 同
 それからは魯軍赤十字旗許り樹て 同
 運送店の端書何々様送り 同
 萬歳は愛國丸から先づ唱へ 梧桐
 降参すりや樂なものだと魯介云ひ 電
 勤七は手代儉三若旦那 鹿道仙
 追はないに哈爾賓までは御足勞 氣樂
 ハイカラ一首の廻らぬモデル也 當八
 郊外寫生あたりキロく眺てゐ 啞蟬坊

川柳久良岐点

繪師の家モデルが妻に成上り 同
 話では大作計り出来る 畫家 同
 鉢卷を取つて號外讀んでゐる 馬齡子
 三つ指で式臺にゐて毒を云ひ 三日坊
 お銚子の替り目女中すねて見せ 同
 騎馬巡查鼻へ馬穴を持つてくる 久良岐
 騎馬巡查命からく 劍を振り 同
 氣のセイかシンコと五分は小聲なり 三日坊
 舞臺では露兵ちつともでかくなし 同
 三階の露兵拳固で目をまわし 同
 支那兵は樂なものサと仕出云ひ 久良岐

川柳久良岐点

音に聞く黒パンはこれかと捻つて見 同
 コリヤ喰はれぬと黒パンを噛んですて 同
 色男どれも髯から目ばか出し 同
 垢焼がしたワイ杯と鏡を見 同
 剃刀をお持ですかと頤を撫で 同
 儂も何だか痒いと肥いで見る 同
 お饒舌が過ぎて入齒を落ことし 馬
 押入の戸棚細目に夜具が見え 同
 オット溢してはと首を長くする 同
 午前二時おでんやア、と欠伸をし 同
 きよろくと見廻し暖簾をツイと潜り 同

鈴

川柳久良岐点

役者より女房が露將不服なり 三日坊
 雲上に提灯ゆらぐ難有さ 同
 お前さん氣が利かないねえ魯介では 久良岐
 己れも魯介は氣無しさと頤を撫て 同
 大掃除蚤驚いて飛び廻り 同
 石灰を餘り撒いたで怪まれ 同
 電車がさしますので皆さんが杯大家 同
 いづれ其中御挨拶をとすッぽぬけ 同
 洗髪雪駄チャラく美しい女 同
 騎馬よりも騎駱駝巡查などがよい 同
 吉原で二代目露八續ぎ手なし 大灣堂

川柳久良岐点

算盤屋玉を磨いて串へさし 三日坊
 ちと腕が痒くなつたと支那はいひ 同
 時宗へ餘慶溢れて贈一位 同
 十四日水雷日だと警戒し 久良岐
 新日蓮曰く佛教天魔耶蘇國賊 同
 如才ない坊主神官寄せたがり 同
 一列すましてロシヤを拂ひ給へ天理王命 同
 節穴に日がさすとやツと起き 啞蟬坊
 ペコくとしながら横で舌を出し 同
 それならと云はれて見れば扱困り 同
 うつ向て小聲マサカと跡濁し 同

川柳久良岐点

相見ては笑ふが戀のはじめなり 同
 人毎に唯君だけと皆しやべり 同
 荷車のあとからラムプ持つて行き 同
 押すなくと式部の傍へ寄つて行き 同
 劔舞には内輪歩きの見ともなさ 三日坊
 浪花踊ちよくく面を出したがり 同
 パノラマは鼻を押へて這入る也 同
 珍世界流石に鬼が三味を弾き 同
 藝の無い凌雲閣は百美人 同
 暑くなつて餘計目につく爐の壊れ 金吉
 此端書どこから來たかと印を見る 久良岐

川柳久良岐点

青梅を棄て、子供はバツラく 同
 ぼてふりは板臺計見せに來る 同
 暑くなつては腥いからと買はぬ也 同
 肴屋は刺身の屑を洒落に喰ひ 同
 刺身庖丁で鮪の土手をコイで見せ 同
 水道の恩も忘れて下女なまけ 同
 色男出來たか使おそいななり 同
 据風呂で立はだかツて洗ふなり 同
 湯殿の水道より勝手のがうまいやう 同
 束髪の前髪ヤケに盛り上げる 同
 丸鬢にお結ひなさいと里の母 同

川柳久良岐点

勸工場練らせるやうに出来てゐる 呑吐坊
 水道の有り無しきいて下女は来る 同
 自轉車を擔ついで蛙をノツコく 同
 自轉車を買つたおかげで廻り道 同
 へボ撰手矢鱈うねりをつけて駆け 同
 酔拂ひ行列順序跳ね出され 同
 酔拂ひ查公に向ひ子一旦那 同
 酔拂ひ提灯を先づ没取され 同
 ロハ臺で式部隣をチヨト睨め 同
 モデルにと豫期した妻を畫伯取り 同
 それがよくなしアラよくツてよ 春雨

川柳久良岐点

興入の半年過ぎぬに産婆が來 啞蟬坊
 繪草紙はいつも勝利を豫期してゐ 同
 景氣のいゝ號外買手を聞もらし 同
 女軍なら負けはしないと露助云ひ 濱雄
 地圖ハンケチ滿韓魯國一握り 三日坊
 回向院から大國民が行列し 同
 一軒の店に元帥二三人 同
 號外を店の參謀讀み上げる 同
 交換手あぢな會話を毎度聞き 啞竿棒
 神聖を云ひ出す頃が危険なり 宇皎
 活動寫真見覚えの繪が二度三度 三日坊

川柳久良岐点

活動寫真髻のあるのが説明し 同
 ビシヨ濡れを電車へ乗ってつくく見 同
 猛雨沛然提灯列を亂すなり 同
 死んで少佐より活て大尉と魯兵逃げ 花酔坊
 號外が出る と車屋早變り 芳舟
 其割に下女座布團は小さく縫ひ 秀耳
 必死と爲つて逃げるとは奇妙也 同
 小役人位階を宿帳に特筆し 馬鈴子
 我々は先着捕虜と得意顔 臺灣坊
 神聖のラブよと云ふが又も出來 金彦
 なまけ者試験の弊を矢鱈説き アセン坊

川柳久良岐点

海サチ屋の廣前山の神々集ひ 同
 堀端をヒヨロリくと千鳥足 馬鈴子
 汽笛一聲女工は飯を喰に行き 吞吐坊
 解らない唄で女工に冷かされ 同
 あぶないくと工夫上から聲を掛け 同
 羅宇すげ替すんで一聲汽笛鳴り 三日坊
 廣告屋無藝大食旗を持ち 同
 縁日の會堂門で勸めてる 同
 他所行の聲で牧師が祈禱なり 同
 左へくと新米の巡查やり 幻怪坊
 鶏に胡瓜の苗を皆喰はれ 久良岐

点 岐 良 久 柳 川

芽を喰はれコイツがくと鶏を逐ひ 同
 芝居では一人も死なぬ日本兵 秀 耳
 小娘のコート引ずる許なり 馬 鈴 子
 勿躰をつけて肴屋首落し 吞 吐 坊
 此パナマ何所にねぶちが有ると聞 同
 有丈の慾を牧師は天に乞ひ 同
 氣の早い奴豆腐屋を號外ヤツ 宇 岐
 満腹も三月ぶりだと捕虜おくび 同
 禪をよくねだられる綿子ル屋 三 日 坊
 むく犬に化けぬと子ル屋強く云ひ 同
 ドースルくと下足で火鉢叩いてゐ 九 里 品

点 岐 良 久 柳 川

改良服チト奥山の氣味があり 久 良 岐
 顔を見て巡查言葉が低くなり 啞 竿 棒
 のつそりと電車を避ける鳩の杖 三 日 坊
 満員の鎖を潜る濡れねずみ 同
 小商人兎角手形で首斬られ 同
 わらんじて工夫ジャベルの尻を押し 同
 正直の寫真屋トント受けぬなり 吞 吐 坊
 半纏にはコラと呼び女にはモンあなた 同
 近眼鏡外づして牛鍋突いてる 同
 筋かひが真ッ直かひといつか成 啞 竿 棒
 退屈をするとイソ的電話かけ 同

川柳久良岐点

乳母のやつ子供泣かせてあたる也 久良岐
 臺所で乳屋油を賣りたがり 同
 植木屋は猿の木登などもやり 同
 女の手紙きつと嘘字が一つあり 同
 妻子をも呼寄せたいと捕虜は云ひ 石部金吉
 舟幽霊の出るのは壇の浦旅順口 同
 づるい奴も辭儀で藏をたて直し 三日坊
 待せられ葺嫌ひの所在なさ 久良岐
 待せられ扱襖を見額を讀み 同
 應接所少しく捕虜の氣持がし 同
 蒙御免ッて常陸山入院し 金山彦

川柳久良岐点

見物も蒙御免ッて不入なり 同
 この不入ではと年寄も蒙御免 同
 京式部アラようおますナリといひ 洒落亭
 無器用な手付で捕虜は箸を持ち 米鳩
 笑ふ子をハイチャイなどで泣出させ 吞吐坊
 三錢になつて鼠が暴ばれ出し 三日坊
 勸進元の涙雨でごんすと力士云ひ 一波坊
 鼻の下我ながら長しと髯を付け 電
 車掌曰動きますお客曰轉びます 闇牛
 御自慢の大弓幕へフーワリ 幻怪坊
 煙草の親治事務官正七位 大灣堂

川柳久良岐点

断ると坊主殊更りんをふり 同
 新脚本科白が出ぬて待ったなり 久良岐
 先生と云はれる馬鹿に久良岐成り 同
 大勝利見て来たやうに湯で話し 金彦
 大勝利伊勢屋も秋刀魚膳へ付け 同
 振はない角力水さへ吞めぬなり 大灣堂
 八ッ當り下女大根を百六本 三日坊
 雨も降らぬに入掛とは情けなし 同
 寒さうに角力見てゐる五十人 同
 木戸番の相撲素敵な欠伸をし 同
 其三ッを捻ぢれと客は伸び上り 同

川柳久良岐点

身振して四本柱へ説明し 同
 溜から出る屁理屈は物に成り 同
 挨拶の合間々に子をあやし 吞吐坊
 騎馬巡查馬より先に疲れ出し 月星庵
 坊主の武装アビラウン劔を振廻し 幻怪坊
 神主の武装焼鎌の利鎌もて 同
 つんとして海老茶角帽の前を行き 啞竿棒
 ドラ息子戦地で死んで名が揚り 大灣堂
 手短の祈禱がすむと信者散り 三日坊
 アーメン！五月蠅鐘が遠慮なり 同
 地圖半ヶチ露國のトコで鼻をかみ 同

川柳久良岐点

花月卷どれも式部の様に見え
 朝寝丈文明らしい傳馬町
 大門と聞いて生醉芝で降り
 手紙かく側でべチャ〜長話
 急ぎ物仕上げといふに邪魔な客
 切抜いておいて東京よりも迅速？
 棄てられた雪駄婦人が拾ひ上げ
 雪駄チャラリチャラリ〜てお練り也
 三臺の二臺ヤの字のお姫イ様
 下駄屋と齒入や曲獨樂と云ふ手付
 齒入屋は四三に鼓打つてゆき

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 吞吐坊 同 玉子 久良岐

川柳久良岐点

肅然として砲車を送る柳かげ
 砲車曳く水兵遅々の歩みぶり
 白無垢に抱かれた子供がんぜなし
 水氣ある脚氣は人がふびんがり
 往來の脚下に涼む四條橋
 一寸涼みが永代を通り越し
 戻橋鬼の出るよなとこでなし
 覺えてゐろは犬の逃吠の格
 風船は翠丸の如くちよむなり
 夏コト細君再思三思の後
 夏コト細君頻りと用を説き

同 同 同 同 同 同 同 同 同 同
 三日坊 同 同 同 同 吞吐坊 同 一波坊 山 水

川柳久良岐点

夏コート有ツても悪くなけれども 同
 旅順口只パクくとやつてゐる 由松
 指揮官が先ふるへるで卒ふるへ 同
 乗かへと呼ばれて人の足を踏み 馬鈴
 満員に坊主悠々腰をかけ 金彦
 耶蘇坊主おかけなさいと座を譲り 同
 居候召集受けてもてるなり 同
 圃はれの家に張板新らしい 三日坊
 水菓子屋蜜柑の尻を拭いて出し 同
 その川柳見ると式部は鏡を見 岐陽子
 回診にダブつくからと茶は吞まず 久良岐

川柳久良岐点

久良岐自す、此回は佳句多く候、中にも耶蘇坊主、水菓子の二句は秀逸と認め申候▲又、三日坊君に就きて、日本新聞に「三日坊光秀然と旗揚し」の句あり、他にも「三日坊吞吐坊は日本の移住民」の投句有之候が、同君は拙著川柳梗概を読んで川柳信徒となれる者にて、拙句が日本新聞に見えたるより直に同社に就て拙宅を知り來訪され、一時機關の無きまゝ日本へ投稿したる迄にて、光秀でも何でも無之候、吞吐坊は同君の友人に候只坊の名を附するを以て直に劍花坊氏の門人なりとするは、早計も甚しく候、坊の字を附すること、余が十六七年前に始めて徒然坊と號したる時には天下只朝日新聞の東歸坊氏より外は無かりしに候坊の字何人の特有物でも可無之候阿々

金屏風一重がうちは反古で張り 馬鈴

川柳久良岐点

破れ軍服禪などもぶらさがり 三日坊
 旗持を三河町から狩りあつめ 同
 綿ヲル美下女は流して發展し 呑吐坊
 釣堀で鯉よりウヌが引かゝり 幻怪坊
 纏つた縁談姑が出て又こわれ 呑吐坊
 前の嫁がく と姑ほめ 同
 ハイカラ一足元の犬蹴り飛ばし 同
 子を産むを待つて長松鼠捕り 金彦
 官吏の買物現金だから負ておけ 秀耳
 月賦の呉服物汚れも泣ねいり 同
 柳原僕に合はぬと念を押し 啞竿棒

川柳久良岐点

久良岐云ふ、余が宿痾ヤ、重く頭腦を費すに堪へずソコで以上
 は妻女の余に代つて撰べる者、左様御承知を乞ふ

拙者の六號字御推讀をと端書也 久良岐
 六號字ステロの時に踏み潰し 同
 四肢冷却龜の子の縮む氣持がし 同
 私の川柳などはありませんと細君 同
 御順にと車掌は客を押詰める 宇岐
 乗替切符傲然と呉れるなり 同
 腰掛の式部意外に幅を取り 同
 御最負にとも云かねる葬具商 同
 葬具屋の女房お世辭が無いがよし 同

川柳久良岐点

號外を下女小一町追ッかける 同
 號外一枚どれ〜と寄る頭 同
 試験前まで悠然と梅曆 同
 出ぬ鼻汁に絹ハンケチを匂はせる 同
 切前がすむとド〜スルぐつと減り 同
 源氏節無闇と宮重計り見せ 同
 御法談義太夫節を活用し 同
 共用栓以來會議は廢止され 同
 献金を勧める奴はのせぬなり 同
 新婚旅行とは云へ實は二度目なり 同
 伊勢屋では金米糖に箸を添へ 同

川柳久良岐点

凌雲閣アレが吉原かと聞初め 同
 一粒當てにもならぬ豆鳩にやり 同
 川柳屋左程悪氣もないのなり 同
岐評 佳句多く候、乗替切符、腰掛、葬具商、號外、梅曆、共用栓、獻金、新婚旅行、一粒當、源氏節の諸句宜しく候、中に
も一粒當の句奇警に候、川柳の觀察はかくあり度候
 賣出しの看板大の字がお景物 美甘坊
 軍艦に羽根がほしいと旅順口 化地藏
 眞暗な立關手探りて下駄を穿き 馬鈴
 おらがチャン軍に出たと力味む也 音樂
 號外や賭博でもとて皆取られ 同

川柳 久良岐 点

尼古拉斯の眞言オンコロくく降りソワカ 白旗坊
 人道車道さて横町が魔道なり 悟新坊
 憲法に戀愛保障を式部説き 雲突坊
 平氣にて元私はと語り出で 幻怪坊
 好なやつ昔男に成たがり 同
 ソリヤ聞えぬと聞えた僻に泣出し 同
 素晴らしい誠にハヤと獨逸ほめ 同
 母さんのお若い内は何式部？ 金彦
 お手紙をお受け申せば未納税 大灣堂
 電話の喧嘩エ、面倒と断つてのき 三日坊改 水日亭

岐評 眞暗な玄關、横町魔道、元私は、昔男の賭句秀吟に候、

川柳 久良岐 点

細君は矢鱈吳服の句をば抜き 久良岐
 安警部 只我鳴りつけく 同
 臨月はガンガルーといふ躰で行き 同
 號外が繪草紙になる其早さ 静姫
 牛肉の罐詰律師非時に喰ひ 幻怪坊
 六月の巡查基石の様な服装なり 美甘坊
 焚ぞこね二日がゝりて鶏が喰ひ 園子
 八字髯電車で先取權を振り 秀耳

分けて幻怪坊子の二句は、平常の手腕と異なり、遙に超出致し
 候、これを古川柳に列するも遜色なく候▲水日亭は三日坊君の
 改稱に候、これにてミツヒアと讀ませるシヤレに候

川柳久良岐点

負續けた力士は直ぐに病氣なり 馬鈴子
 ア、メンと云つて横をじろく見 モ、ヨ
 一等に乗て早い不平なり 馬鈴
 一日の口開けメた女客 水日亭
 大急ぎ岡持だけは静なり 同

(第一回川柳會記事)

寛政二年初代柄井川柳歿す、爾來斯道日に汚下し、文藝の光に
 接せざると、爰に百十五年にして、始めて其遺響を聞いて起つ
 者は、實に吾第一回川柳會となす、事甚だ小なるが如しと雖も、
 復た文藝史上の一材料として、輕視するも能はざる者あり
 明治三十七年六月五日、午後一時第一回川柳會を久良岐の自宅
 に開く、會する者水日亭、顔壺師、啞竿棒、啞蟬坊、吞吐坊、

川柳久良岐点

金彦、(着順)の六氏とす、久良岐が「川柳の美學上分類」の講
 演後、前句付の古に倣ひ「見事なりけりく」「うかりくとく」
 の二題を課し、別に「夏に關する風俗人事」「入浴」の二題を添
 ゆ、互撰の結果最高十九點水日亭、次十七點吞吐坊の二子撰手
 の榮を得たり、午後六時散會、當日横濱幻怪坊子病氣の爲め不
 參、其他尾上文學士の講演、川瀬順輔氏の尺八千鳥曲等都合に
 て、次回に行ふとせり、今左に其咏を掲ぐ、但し余が再撰し
 たる者

(見事なりけりく)

(うかりくとく)

角力取鎧を着ると寫生され 久良岐
 物思ひ電車のりんで飛でのき 吞吐坊

川柳久良岐点

野良息子初手からこんな氣ではなし 同
オイ君と云はれて肩も叩かれる 啞蟬坊
左りへと云はれ狼狽て、右へよけ 啞竿棒

(夏に關する風俗人事)

水道 栓見では車屋立どまり 吞吐坊
大男 ミゴの繻にて蠅を逐ひ 啞蟬坊
置 忘れくくては買ふ扇子 久良岐
扇子 パチく 所在のない暑氣見舞 同

(入浴)

丸て鴉の行水だねと笑はれる 久良岐
叩かれた返事三介釣瓶でし 水日亭

川柳久良岐点

拍子木を合圖に三助罷り出て 啞蟬坊
湯屋の亭主コリヤお素人には暑からう 啞竿棒
三助は同じサワリを毎度聞き 吞吐坊
其當座姑は嫁を風呂につれ 顛臺師
お風呂なら坊も御一所にと拔目なし 金彦

岐曰く、以上の中水日亭釣瓶の句、吞吐坊サワリの句高點を獲たるに候▲樂屋落の文藝に非らざるとは少しく文事に志ある者の知る所に候趣味は汎く公衆共通の者ならざるべからず候、二三同人間に於て笑樂の具に供する樂屋落は、個人間の私信の如き者に候▲彼の商業家が自家の商品を自家に供せざるが如く、法官が情實の爲めに其裁判權を曲げざるが如く新聞記者が無闇に提灯持を許さざるが如く、川柳は川柳として尊敬し、趣味の公汎にして句命の長き者を要すべきに候▲近來川柳を以て撰者

川柳久良岐点

を嘲り又は稱揚する者、或は同じ作句家の品評を試み、又は生命短き新聞の雑報を種とする者、皆悉く非なる者に候、一言注意致し置き候

川柳家スグと共喰ひおツばじめ

夏座敷	敷	當座	は	心落付	かず	岐陽子
夏座敷	つ	い	人	の家	覗	くなり
惜	しい	哉	髪	の	臭	いが
玉	に	瑕				
お	白	粉	の	剝	げ	た
お	貌	は	夏	の	富	士
母	の	留	主	仕	事	な
ま	け	て	本	を	讀	み
高	利	貸	先	づ	氣	味
悪	く	ニ	ヤ	リ	ツ	と
し						
高	利	貸	ワ	メ	ク	を
背	中	の	子	が	笑	ひ
鉛	毒	を	説	く	女	教
師	が	寢	お	白	粉	
同						

川柳久良岐点

女	教	師	は	高	慢	ね	え	と	す	ぐ	云	は	れ	同
未	亡	人	四	十	越	し	た	に	湯	屋	化	粧	同	
ソ	ツ	ク	リ	な	寫	真	咏	め	て	マ	ア	お	化	同
一	人	ツ	子	甘	や	か	し	て	は	云	ひ	譯	し	同
女	學	生	髮	丈	下	げ	て	小	供	振	り	同		
母	親	は	自	分	の	娘	眼	鏡	で	見	同			
棄	た	花	雨	で	生	き	る	と	惜	く	な	り	同	
奇	麗	だ	と	婆	々	は	畫	本	倒	サ	に	見	同	
可	愛	い	子	叱	つ	て	嫁	は	孝	行	し	同		

岐評 京子は江戸系の一少女、古に稱す川柳は江戸人種頭腦の特産物と、我れ今日にして其言の偽らざるを知る、今此篇を見

川柳久良岐点

るに、通篇悉く珠璣を聯ぬるが如く、また一冗句の取捨すべき
 なし、京子果して川柳に天才を有する乎、我れ諸君と共に此才
 女を吾川柳壇に有するの慶福を祝せずんばあらず
 又評 觀察機細に入り、時に人の悪きやうなるも、又棄た花の
 句の如き少女の情を失はざるは喜ぶべし
 メリヤス美先づ玉乗りて發展し 水日亭
 メリヤス義太夫の支度出來上り 同
 汗かいたメリヤス皮を剝すやう 同
 御持參の櫛で湯屋の髪をかき 同
 尋常科だけで妹は下げるなり 春雨
 工科だけ火事まで遠慮なく燃える 鳳似
 貸家札大家奔命に是れ疲れ 啞蟬

川柳久良岐点

八セシが雨で綿入引き出され 同
 其亭主も客が有ると逐出され 榮久知
 以後も見知置きをと名ふだ出し 吞吐坊
 母親の留守に急いで文をかき 啞竿棒
 灰吹をボンと叩いて扱といふ 同
 御高名只自分だけ承知なり 幻怪坊
 渡り者前の主人を譽めちぎり 同
 口惜しいと旦那の膝へ喰ひ付 同

岐評 佳句多く候、太夫の支度、汗かいた、額を撫て、貸家札、
 八セシ、其亭主、以後、食客、母親、腰巻、灰吹、御高名、渡
 者の諸句宜しく候▲中にも汗かいた、八セシ、食客、灰吹、御
 高名、渡者想調共に佳也と信じ候▲三撰の後灰吹渡者の二句を

川柳久良岐点

秀句と認め候

高架鐵道兎角下界のアラが見え 不倒坊
 鳶頭窮屈さうな施主に立ち 金 彦
 興脇の袴胸高尻ツコケ 同
 恐るく熊公八公も焼香し 同
 施主丈は汗をふきく列につき 水日亭
 弔の菖蒲へそれる迄はよし 同
 葬具屋は悔みの中に世辭を云ひ 同
 ヤレくと和尚しらせに珠數を繰り 同
 満員の扉で袂はさまれる 馬鈴子
 川柳でクサス式部に實は惚れ 啞 蟬

川柳久良岐点

下女許節約につき粗食され 同
 丁髷に帽子をのせる角力取 啞 竿 棒

岐評 佳句多し、不倒坊ヤ、佳、金彦の句皆滑稽、水日亭の句は輕妙、就中ヤレくの一句古人に迫る、啞蟬の實は惚れの調刺能く癡骨に中る至妙痛快と云ふべし、啞竿棒の力士の句、寫に出でたるが如し、自然の滑稽、其着眼の凡ならざるを知る

▲水日亭の報告に曰く 仰に従ひ、初代川柳翁の墓碑、六月三日香吐兄穿鑿、辛うじて見當り申候、(淺草新堀端榮久町三十八番地) 天台宗寶龍寺に有之、墓碑は去廿七年中の改築、正面に「柄井川柳之墓」とのみ刻まれ申候、只寺門の側に「木枯や跡で芽を吹く川柳」の句碑有之候、參詣は可なり有之候由云々

▲本所金彦報に曰く (前略) 本月初代川柳居士の墓參致し候、九世川柳殿逝去後とて、新卒塔婆林立致し居候、留守の者同氏の縁故とても思ひしか施主に通告する由申候故、住寺の歸宅後

川柳久良岐点

示し呉れとて、六月八日の電報新聞一葉を残し、新柳楳久良岐氏門下の者とのみ申添へおき候、只残念なるは昨日の川柳會記事を讀經に代へて誦せざりし次第に御座候云々

(はつきりとするく)

夜手習白石(人名)水をサツと浴び 京子
 夜仕事にホヤの曇をおし拭ひ 同
 舞臺より棧敷の方を見る眼鏡 吞吐坊
 自慢にもならぬ近目の度が上り 同
 活動寫真すんで電燈パツと付き 水日亭
 トンネルを汽車が抜けると欠伸をし 同
 油繪をガンチ(片目)になつて數歩のき 同
 現像をすると段々顔が出て 同

川柳久良岐点

オヤと云ふ後は目と目で物を云ひ 宮坊
 甲板でコロンブス一人躍り出し 一波坊

岐評 水日亭、秀耳、京子、幻怪、宮坊、一波坊の句皆宜しく候、中にも舞臺、自慢、トンネル、油繪、膳椀、コロンブス等宜しく候▲三撰の後トンネル、自慢の二句を秀逸と認め候

(我もくくと)

債券の割増金を算に入れ 水日亭
 俄雨車掌のそばに五六人 初岐久
 軍人のお奥様めかす束ね髪 樂雅喜
 出る時はいの一番と寄席のはね 蝸牛
 下女までが前髪ヤタラふくらがせ 美津男
 千世傳は宜小唄に整列し 秀耳

不景氣だくとて酒を飲み 幻 怪
 武装した飴屋凱歌を奏すなり 顛 臺 師
 大將のうぢや〜出来る難有さ 水 日 草
 四五年前から依然たり電話架設中 金 比 古
 お歸りツと玄關へ高くどなり込み 馬 鈴 子
 二人から式部は已に姦ましい 月 星 庵
 ハイカラ、鏡の前に立止り 天 口
 式部ツて内の姉さん見たよなの？ 一 波
 番頭より小僧の意見條理あり 臺 灣 坊
 號外や鈴をふり〜汗をふき 啞 蟬 坊
 下心有之貴方ネルに遊ばせな 悟 新 坊

岐評 武装、電話、二人式部、ハイカラ、内の姉さん、番頭、
 號外、下心、皆佳、中に就て内の姉さん、番頭、號外、下心大
 佳、然共式部の句添削を加へざるを以て秀逸とす▲又曰 募集
 前句附中、軍債應募、決死隊の如く、道徳上の美談を材料とせ
 るは不可也、川柳は文藝也、文藝は情感の上に立つ者、美感な
 る人に興ふ者ならざるべからず、花を見て美なりとするは感情な
 り、花を見て藥毒の有無を知るは科學也、道徳の美は花の滋養
 を知つて愛する如く、感情の義は花の色彩香芬を愛するが如し、
 者混同すべからず、故に川柳は背理的諷刺滑稽の美感上に立
 つことを忘るべからず

兄さんが急に貴方と 早變り 雲 突 坊
 巡查とは人を叱り付る道具なり 三 木 尾
 悠然と川岸で一日釣られてゐ 井 仲 者

川柳久良岐点

落付いて飯の喰へぬが迎ひ僧 不倒坊
 行水や雨戸倒れて下女の尻 一波坊
 昔ならナアお爺さんソウだとも 秋 天
 玩弄屋の前で地團太ふんでゐる 馬 鈴 子
 近視眼命の次は眼鏡なり 月 星 庵
 貸本屋人のひまをば付ねらひ 柳 舟
 古日記去年の今日をくって讀み 金 太
 居候返事のいゝは飯の時 春 雨
 卒業の歸省凱旋の思ひ也 森 巖
 借て來た傘を途中で忘れて來 秀 耳
 暇乞ひ申すトタンに裾をふみ 金 彦

川柳久良岐点

梅の實はスイな方やとヒタと寄り 幻 怪
 撒水車押へながらに土砂をたて 水 日 亭
 電話にて親治の在否伴聞き 啞 竿 棒
 下女形の式部許が生捕られ 久 良 岐
 食券を握る紳士の皿眼 大 入 道
 バイオリン弾けそうに式部携けて往き 啞 竿 棒
 吉原は切符となりて時島 一 波 坊
 社會主義腰辨當を感化する 初 音
 お廊下へのそりくと痕をつけ 金 比 古
 まだ落ちてゐるか知らんとキョロくし 秀 耳
 不意の暑氣見舞度々狼狽て通す也 金 太

川柳久良岐点

其當座鴛鴦の如くに散歩なり 雲永庵
大和尚墓場へ桐の苗を植ゑ 幻怪坊

▲水日亭報告 柳友壺灣坊勳七等憲兵上等兵澤崎兄は、出征の
電命に接し、勇躍并舞今十四日一番汽車にて郷里某師團へ出發
せられ候、軍國多事吾川柳界の慶事何者も之に如かず候

川柳の法螺で露兵を吹まくれ 久良岐

血も出ぬに身を切る思ひと女いひ 秋天

旅順談ゆるくすんで脈を取り 水日亭

獨酌でじろく見ては一寸呑み 呑吐坊

(自謙) 傘無くも鼻を濡した例しなし 秀耳

(同) 細そりと柳腰だと僕をほめ 同

(同) 悪洒落を見ては久良岐は憤り 久良岐

川柳久良岐点

(同) 運動不足瓦斯發散に度々弱り 同

(同) 御病身按摩と醫者に手を引かれ 同

(同) 骨皮の筋右衛門だと誰か云ひ 同

(同) 臀の肉落ちて先生危坐し兼 同

(笑ひこそすれく)

先生の字名生徒がうまく付け 啞竿棒

ハイカラ一電車でひよろくひよろとこけ 同

昔し着たお振袖だと婆々は見せ 金比古

旅日記コリヤア彌次喜多にありそうな 同

何の事捜し當てたら貸家札 同

ゴロの帯三兩したと度々聞かせ 同

川柳久良岐点

間違へて電車で逆に五六町 吞吐坊
 付髯で氣取つた顔のむづかしさ 同
 早乙女は名丈みやびで手鼻なり 雲水庵
 大田植でかいおいどが一ダース 同
 二階の書生時々屁をば浴びせかけ 久良岐
 細君の浴衣を出して客に着せ 同
 綱引の下女に家中總がゝり 同
 お茶番に團十郎が幕をひき 同
 六月十四日外従弟大井退藏（大井檢校養子）
 の葬式を送りて
 極樂の日本町へ君も住め

川柳久良岐点

（自詠）人のアラ能く云ふ丈にウヌも知り 幻 怪
 （同）命欲し金も欲しいで薬なり 同
 （同）前世は立派な人であつたげな 蝸 牛
 （同）我は畫師到る所で耻をかき 宮 坊
 （同）君は感情の人だと云はれベラポーメ 久 良 岐
 （同）自分の棚卸お手柔は卑怯なり 同
 （耻かしい事）
 花嫁子半時許寐過ごして 病 猩 々
 意氣揚々行つたはよいが不合格 吞 吐 坊
 派出所の説諭に人の山をなし 悟 新 坊
 式部へと贈つた文が附箋なり 圓 角 坊

川柳久良岐点

弟が大事な寫真母に見せ 啞竿棒
 廣げた大風呂敷が繼だらけ 幻怪坊
 善さそうな縁サとカビネ見せられる 門外坊
 うろたへてズボンの釦はめ忘れ 啞蟬坊
 紋所丈は歴史の光あり 金比古
 此降りに思ひ切つては端折られず 蝸牛
 義太夫をやらにや立派な旦那様 不倒坊
 イ、お子だ！母の脊中に小さくなり 宮坊
 生酔にぶつかり人に顔見られ 京子
 (自詠) 妻あらば恪氣もすらん爛徳利 病猩々
 (同) あきッぽい事は妙だと家内云ひ 水日亭

川柳久良岐点

(同) 自分の非一生書いて餘る也 京子
 (同) 洗濯が溜ると下女に世辭を云ひ 吞吐坊
 (近寄にけり) 其僧に問答無益うちのめせ 金比古
 局長の靴音スワと筆を持ち 病猩々
 貞奴出たかとお外づす伊達眼鏡 同
 サア撲つならぶちアがれと腕を出し 宮坊
 下調べ付かぬに試験の掲示が出 啞蟬坊
 どうしても空似と見えぬ歩きつき 門外坊
 近眼をかこつけにしてすきな奴 幻怪
 野良猫が出たと魚屋抜き足し 啞竿棒

川柳久良岐点

シテ密談とは如何なる件と願を出し 同
 女連れ三井の前で足を留め 同
 お肩をと膝を進めて按摩云ひ 京子
 細君はお茶を勧めてモシ貴方 同
 店卸サア元帳のくゝり上げ 水日亭
 定九郎式に露艦は出来上り 久良岐
 裸躰美の元祖は九尺二間なり 門外坊
 泥棒々々と云つて泥棒逃げる也 山伊智
 古傘を貸すとスポリと柄が抜けて 馬鈴子
 近増りして白あばたジツト見る 悟新坊
 ラブそれは惚れるとよと女工いひ 與太棒

川柳久良岐点

若旦那號外賣となり下り 大灣堂
 安藝者に惚れられたさの馬の脚 頓興
 移り替ア、早まつたとふるえてゐ 不倒坊
 (自謙) 亞米利加の國旗然たる元あたま 金比古
 (同) 學校の遅刻毎日朝寐から 京子
 (同) 式部より僕等女中に目が移り 吞吐坊
 お神樂の見物共に首を振り 啞竿棒
 煉瓦積み時々片眼つぶつて見 同
 理髪師はお客の頬をひねり上げ 同
 酒喰ひ勘定までをグツるなり 圓角坊
 給料の高い者丈働らかず 石金吉

川柳久良岐点

酒飲はこぼしたヤツも一寸嘗め 雲水庵
 活人書拙づい者ほど活て見え 京子
 讀出すともう一枚が八九枚 同
 取逃がし男之助を小僧さめ 同
 生酔は取まく子供キツと睨め 同
 萬福を文久錢で買ふ氣なり 同
 父様は坊よりお髯可愛がり 同
 電話口留守の樂屋が先へ知れ 中間坊
 機密漏洩の恐有と活字は背を並べ 水日亭
 禪宗の提唱畢から聲を出し 同
 執達吏泣けばうぶだと酷い事 同

川柳久良岐点

執達吏帯を解けとはぬかし兼 同
 水道工夫鉛のトグロのたつかせ 同
 試験前飯が強いと怒鳴つけ 敬登
 利いた奴東郷カラーを先づ付る 金山見
 藪醫者は末期の水を纏て賣り 櫻坊
 看護婦にでも成ますと云て泣き 君峰
 素顔より寫眞の方がよくツてよ 水品
 村長の祝詞一段上手なり 金色坊
 門を出て次第々に肩と肩 翠湖
 其時丈は親なれど邪魔になり 日堂
 おらがへも寄らッせえよと手鼻かみ 金比古

川柳久良岐点

パタ／＼とハタいて米屋話をし 同
 お客様馳走は無えがと芋を堀り 同
 拍子木で飯に駆け込む大問屋 啞竿棒
 着せ更て帯を叩くと兒は走り 水日亭
 大掃除下駄の供養に風呂が沸き 同
 水仕事手をふきながら乳をのませ 京子

六月十九日曜日久良岐社川柳小集來會者、金比古、水品、啞竿棒、啞蟬坊、京子（水日亭連參）の五人、課題當座「寄合にけり／＼」「こわい事なく」「陽替」衆議判の結果、京子高點
 啞竿棒次點

醉はぬのに新米の車夫千鳥足 京子
 美人とも云ひかね色つやを譽る也 同

川柳久良岐点

ハンモツク試験の爲に下女をのせ 啞竿棒
 (時事) 閉塞の犬くゞりより露艦出て 久良岐
 (同) 總裁は破産の火の粉拂ひ除け 同
 (だましこそすれ)

房州はお前意氣だよから釣られ 願臺師
 可愛いと申しましたと息子云ひ 春雨
 忙中閑ありで御無沙汰致し候 幻怪
 ワン／＼にどら猫お化乳母は蓄ひ 蝸牛
 ホーラどん／＼が來ましたと乳母背負ひ 啞竿棒
 お留守居の父が子供をねんねこし 京子
 (手柄なりけり／＼)

川柳久良岐点

横面らをどやした銃が御天覽 吞吐坊
 長松は白き鼠の尾を押さへ 貧寒坊
 あの式部とうく彼奴が肯かせ 顛臺師
 既にして娘旦那を丸めこみ 一波坊
 乳母が出て試験の點に尾鱗つけ 水日亭
 先生に讀めぬ金釘下女が讀み 中間坊
 (つらい事かなく)
 伯母さんの前で式部は針仕事 蛙面坊
 領袖も高利貸には告訴され 雲水庵
 四方からちゃんなさいとせつかれる 不倒坊
 兄さんは他所の妹を可愛がり 幻怪坊

川柳久良岐点

うつかりとして選舉人の名を忘れ 同
 (いつかくとく)
 モウ年頃と親の話すを嬉しがり 啞蟬坊
 急ぎ旅プラットホームにぢれてゐる 幻怪坊
 我顔と相談もせず尻を逐ひ 秀耳
 女房は徹夜嫉妬の角をため 一波坊
 電車故障者も左も大欠伸 水月亭
 供待の車夫は欠伸をきこえがし 京子
 冬瓜の手裏剣でウキを腕みつめ 同
 供待の車夫は程なく高いびき 水日亭
 冷かしらしくないがと店で欠伸をし 同

岐評、欠伸の句讀んで先生も欠伸をし
(樂しみな事く)

蕪入の作戦計畫に日も足らず	不倒坊
ヒーキ相撲勝つと一日ニツコニコ	顛臺師
✓ 新婚旅行トンネル許りねらッてる	春 雨
這へば立て立てば掴めと髯を出し	幻怪坊
渡米中寫真見合ひの代理をし	水品坊
晴着をば出来ぬ内から手に通し	京 子
母ちゃんのお目ザはいつも乳に化け	柳 蔭亭
氣の利いた姑當座は出て歩き	啞竿棒
媒人の話すをソツと式部聞き	啞蟬坊

(時事) からめ手は毎度田樂許り焼き	久良岐
(同) 此野郎と露艦手捉にしたく成	同
(同) 喰逃のデカイ畜生取逃がし	同
(同) 猿化して猫となるのは東京座	同
乗違ひマ、よと電車一週し	吞吐坊
赤馬車で耳を押へる頭痛持ち	同
無提灯説諭はするが扱こまり	同
御祝儀の利き目は目前此通り	同
看板を財産にする賣藥屋	同
男親子供を負ふとあはれ也	同
手拭の浴衣畫割のやうに見え	同

川柳久良岐点

小便の留守頼まれる大入場 同
 御簾上げる時丈大夫見事なり 同
 睨み上げ棟領下知を傳へてる 同
 一分刈當座坊主と取ッ違へ 啞蟬坊
 女教員サテ何となく淋しそら 同
 (時事) 佐渡殿は御無事常陸が難に逢ひ 大灣堂
 (同) のふく此船にはアヤカシが附て候 久良岐
 汽笛一聲ゴトリくと汽車動き 水日亭
 幕合のドット拍手で木が這入り 同
 試験前スワ鎌倉と本を出し 同
 投り込んだ石がどうやら効になり 同

川柳久良岐点

エンサイクロペチャ蓋し學者のミィラ也 同
 禪を屑屋リウくしごいてゐる 同
 公園を見合場にするハイカラー 水品
 背中にも一人ゐる升と御施行 金比古
 村長は上座に直りサテといふ 同
 ラブ位知ツてゐる升と母はねめ 同
 抜道をしたても通夜の鐘を聞き 同
 ハイカラーお顔長いが能く似合ひ 同
 人頭を調べて村長口を切り 岐陽子
 式部もと金釘流の達筆家 同
 (陽賛) 坊ちゃんて入らッしやい升かと譽られる 久良岐

点 岐 良 久 柳 川

(同) 山の手で隠れもあらぬ式部なり

同

(同) 家政學實驗澄のみ式部御前

同

(つらい事ながく、流行こそすれく、うるたへにけりく、
見えつ隠れつく)

自轉車をしをれて擔ぐ濡れ鼠 水日亭

よく口が掛るが寫真返へされる 同

澄し込んで座り込む客門違ひ 同

頬張て乳母は乳房を含ませる 悟新坊

寶生と觀世でロンギ謠ひ分け 同

長話欠伸幾つか嚙殺し 蝸牛

明方に巡查るねむりしつゝ行き 啞竿棒

点 岐 良 久 柳 川

螢籠まだ居る筈と透して見 同

縁日の見世物幕を上げ下ろし 同

敵將は木影を楯に號令し 雲水庵

どう見てもお手製らしい安バナマ 秀耳

長襦袢これ見よがしの足運び 同

一本頂戴とお先煙草をスツパく 不倒坊

解そうにする娘故氷賣れ 宮坊

社會主義人の寶が欲しいやつ 同

試験切迫秘藏のノート又忘れ 馬鈴子

藪なれど人氣の脈は上手なり 幻怪坊

奥様は勤儉鬻の御獎勵 同

川柳久良岐点

雷鳴やスワと逆さに蚊帳を吊り 同
 俄雨下駄を第一大事がり 同
 靴下に雪駄つゝかけ式部行き 顛臺師
 悠然と坐るが店の勤務なり 中間坊
 一寸散歩と云へど親父ごまかせず 吞吐坊
 夏帽子去年の分は親にやり 美砂浦
 お調子に乗つて寄附金筆頭 金比古
 惚れられるマジナヒまでも坊主する 同
 大喝一聲お面かすツて空を撃ち 同
 うらが家丁度アスコの松林！ 同
 約十メートルを隔てゝ尾行する 水品

川柳久良岐点

濱までは先づ一かどの紳士なり 門外坊
 其實は硝子拭きでもやる氣也 同
 憎ていの女ですよとたきつける 同
 警官はソウするちふと説始め 頓興
 番頭の拔裏小僧よツク知り 美砂浦
 ロシヤなんぞ撲つちまへと兄い云ひ 病猩々
 返事せにや此嫁入りは得心か 宮坊
 飛退て見れば蛙め畏しこまり 花菱
 天佑様も聞えませぬと壹岐で云ひ 溪水
 普門品高らかに讀み首締め 金比古
 大掃除針を拾ふと鬻へさし 同

川柳久良岐点

紙袋縫つて土産の麥を詰め 同
尋常科兎角に袖で鼻を拭き 同
梅雨空をみつめて子持溜息し 柳子
ヒビ茶椀八の字寄せて義理に呑み 岐陽子
暑氣見舞煽いで拭いて暑い事 同
追はれたて通學の途式部替へ 同
學者かな慈善の事にも首ひねり 同
(時事) 砲聲がザンブくと風に鳴り 水日亭
(同) 朝顔で舞臺をサラバくと也 同
(同) Tokko(東郷)はい、名一步も退かぬ筈 日の丸
賣れ残り在大學院と觸れ歩き 竹馬

川柳久良岐点

それ程は角帽海老茶に思はれず 同
學生時代に限るよと學士いひ 同
岡目では語學書生が馬鹿に見え 門外坊
元が元夫人時々忍び駒 雲水庵
坊つちやんの留守ラケットが箆になり 岐陽子
悪口をお禮に代へる劇評家 久良岐
お目出度く頂戴杯と盆を上げ 同
裏返しに着たらよさうな羽織也 同
衣食をば奢れど住は直切るなり 同
相場ぢやる杯と店子は値切りつけ 同
下げなけりや退ぞくと怯し付け 同

川柳久良岐点

内兜見られた大屋哀れなり 同
 家主の威張つたは二々昔し前の事 同
 川柳の餘弊大屋にまだ祟り 同
 踏倒された上に立退き料を奉り 同
 家賃をば餘計の物のやうに云ひ 同
 二分の利に付かぬを店子知らぬなり 同
 地代をばのけて店子は計算し 同
 電話にて内所話しを聞直し 水日亭
 得心で耳を貸したが身がすくみ 同
 晝席の花道長い枕なり 同
 中入に客はラム子をぶツこぬき 同

川柳久良岐点

禪へ下女敷當のテモ見事 同
 (時事) 死そうな露兵得利寺に葬られ 木塲庄
 (同) さん候濃霧の中に隠れたり 幻怪坊
 (元の如くに、離れこそすれ、
 野暮な事かなく、陽賛)
 (離) 釣出されバタ／＼もがく大男 秀耳
 (陽) 冒されぬ威風備はる高利貸 同
 (元) 仲人は更に高砂うたひけり 幻怪坊
 (元) 去られたと思つた女房澄してゐ 岐陽子
 (野) 肩書のある大名刺直に出し 同
 (元) 行水の雨戸を小供打倒し 馬鈴子

点 岐 良 久 柳 川

- (離) すれ違ひ電車の窓から挨拶し 鷹十庵
- (元) それ持つと叱られ升と母叱かり 蝸牛
- (離) 出升すよと船頭船に足をかけ 同
- (野) ハイカラは藝者に舞踏仰せ付 顛臺師
- (同) 都々逸の立續けにて欠伸させ 同
- (元) 取り盡す迄は大事な旦那なり 蛙面坊
- (野) ロハ臺の話查公が邪魔を入れ 日の丸
- (陽) 霧なくばおん大將に御昇進 同
- (離) 買迄は草履夫婦といつたやう 啞竿棒
- (離) よろくとして船頭に笑はれる 吞吐坊
- (元) 他所行を借りて火熨斗に念を入れ 水日亭

点 岐 良 久 柳 川

- (同) 藪入は羽根をつぼめて歸つて來 同
 - (同) 盗人の出て行くあとへ錠をかけ 同
 - (陽) 通がりが時々馬を曳いてくる 同
- 岐白す 諸君の附句未だ連歌に類して、甚淺薄なるを覺ゆ、之を
 萬句合に見るに後句の意味に適切ならざるも、一句のナカシミ
 穿ちを主として力を入れたるが如し、然るに初心の人動もすれ
 ば後句に引摺られて、前句の力を削ぎ殆ど平凡極る連歌と同一
 の狀に陥れり、是大に注意すべき點なり、古句の作例によるに
 「胸倉を取るより女房手は知らず、やわらかな事く」 「仲人に
 かけては至極名醫なり、いたづらな事く」 「いたづらな事く」 「且
 意」 「お談議に入らざる嫁に歩めなり、いたづらな事く」 「且
 那の尻目を見合せた許なり、押付にけりく」 「呑まぬ奴ソウ
 サく」と許りいひ、捨て置けりく」 「座はつて嫁は へ
 てズツと立ち、われもく」とく」 「油手を洗ふ娘は をすえ、

点 岐 良 久 柳 川

同上「惚れた」やっ先づこそぐつて脈を見る、そろひこそすれ
く」「頬へ手を謠の時もあてたがり、押つけにけりく」
以つて其附工合の離れず即かぬ妙あるを知るべし、故に後句に
引摺られぬやう十分注意あらんとを乞ふ▲又白 缺茶椀元の如
くに、新夫婦離れこそすれば餘り類句多ければ没書とせり、陳
腐の思想は可成打棄てし、清新の點に注意すべし

（六月廿六日日曜第二小集、開句課題やわらかな事く、

まめな事哉く、冠句いにくひ、誇張）

出來立の蒲團へそつと下女轉るげ 啞竿棒
窮屈な息子とらく遊び出し 顛臺師
笹の雪も信濃が喰つてコリヤ駄目だ 金比古
左へと式部に丈は聲を替へ 啞蟬坊

点 岐 良 久 柳 川

降參がすむと露兵は世辭を云ひ 同
神の鈴ふる子に乳母は手を添へて 寒貧坊
挨拶に先づと布團をすべり落ち 同
煎餅の袋へ息をまけて入れ 不倒坊
氷屋の娘を側へ招き寄せ 水品
内のよい生徒に教師よく教へ アカン棒
御隠居はあした夕べに庭掃除 同
縫物に目鏡入らぬが自慢也 金比古
此皿はいくらするかと弾いて見 不倒坊
燕嬢のお弟子になるとよくツてよ 顛臺師
濱町の馬三崎町で申し上げ 久良岐

川柳久良岐点

いゝにくひ君を愛すとやつてのけ 金比古
いゝにくひ女の望む縁ばなし 久良岐
川柳も僕位にはやりたいて 啞竿棒
一萬八千歳生きた爺さん支那に在り 顛臺師
世界史の一行にてもと新學士 寒貧坊
蓑盆十露盤に乗せソリヤ汽車よ 金比古
ペコ〜に減つたら臟腑居どこなし 久良岐
追剝はいつも雲突く男なり 同
旦那又川柳だよと先へ行き 同
細君の手料理毎度喰せられ 同
越中へ千人結びして貰らひ 同

川柳久良岐点

ふくれると泣くとより外武器はなし 同
明日は是非間違なくて間違へる 同
(時事) 大山もそろりと動き出て 幻怪坊
(同) 足元を見るよくと露艦逃げ 久良岐
(同) アイチツチ蜂が整したと露艦泣 同
(元) 腰辨當竊かにさげて髻ひねり 金比古
(離) 明るみへ出ると鴛鴦右左り 宮坊
(野) コリヤ伴凝るなと親父酒臭し 金比古
(陽) お寺様肴の拂ひ奇麗なり 雲突坊
(野) 悪洒落に云つたをキザが眞に受る 宮坊
(岐陽子撰、久良岐點)

川柳久良岐点

(離) 隊長の一聲ですぐ兵は散り 水品
 (同) 拔出しの政略涼みと母の前 同
 (同) 日曜は是非來給へと右左り 同
 戦地から着いた手紙を持あるき 春
 涼臺椅子にかけたが議長なり 啞竿棒
 火事場には大小の蛇横はり 同
 禪の源平隅田で入り亂れ 同
 神聖で冒されてゐる式部あり 同
 金米糖二粒程がおまけなり 同
 どんな顔と聞かれて一寸行つまり 同
 踏破南山萬雷烟 同

川柳久良岐点

穿たねえ理に合はねえと熊は云ひ 山水
 川柳の旨互に陣を張り 同
 山の手の洒落下町へ通りかね 同
 (離) 生酔は兎角女によるけて來 一波坊
 (同) 式部すね角帽すねられ二人行き 同
 (同) 權助は直覺的に申し上げ 同
 (自諷) 起される度に布團を引かぶり 四國猿
 (同) 饅頭に胃散をつけて大食し 同
 (時事) 涙雨不景氣の風に添ふて降り 幻怪坊
 (同) ヤツカミの獨逸はツヤクを入れたがり 久良岐
 (同) 號外や占領だけはデカイ聲 同

川柳久良岐点

岐自 下女、居候、伊勢屋等の句は陳腐にして、タトヒ古句に
 勝るとも價値少なし、其他の雜題にても古句に比して劣れる者
 は、これを明治の句としては甚外聞悪しき次第、又石地藏、(最
 今日に適せず) 生酔、姑、格子先、和尚、後家等の陳腐なる句
 は可成避くるを可しとす▲但下町は山の手に比し舊式保守の點
 未だ盛なるも、常に清新の材料に着眼ざるべからず▲されど新
 題にても電車、ハイカラ、式部、腰辨、巡查等は多く陳腐に傾
 く者なる故、陳套を脱出せんと試むべし▲品物にても珍柄中は
 價格高けれど、類似品多くなれば下落するが如し▲さらばいか
 なる句を可とするかと云ふに「坊ちやんの留守ラケットが策に
 なり岐陽子」「水道工夫鉛のトコロのたつかせ水日亭」「雨宿りこ
 れ幸と牧師説き啞竿棒」「川柳てクサス式部に實は惚れ啞蟬坊」
 の如き着想をよしとす▲古句と同題にても人情の上に新しき穿
 ちある者亦可なり

川柳久良岐点

お役人然と受附髯ひねり 啞竿棒
 蚤除けを蒔いて親父はクシヤミをし 同
 雨宿り是れ幸いと牧師説き 同
 落第の式部女優になるかしら 水品
 式部先づキューヒット(戀神)にと祈願をし 同
 二八水ヤタラと式部顔にぬり 同
 下女輩迄が事をかしくも式部ぶり 同
 馬鹿野郎糊の利かねえ状袋 山水
 繪葉書の用件隅に畏こまり 水日亭
 進物の繪葉書己ぬが店を書き 同
 吟詩朗々チエースト迄は御丁寧 同

川柳久良岐点

産見舞先づ嬢さんと聞いて見る 同
 挨拶がすむと團扇の無心なり 同
 馬車馬同様九時間の勤務なり 病猩々
 製絲場の女工海老でもシャコ式部 圓角坊
 墓参り帽子を置くでウロ／＼し 不倒坊
 田舎の挨拶馬鹿丁寧で痛入り 臺灣坊
 茶代廢止聞えぬやうに手を叩き 中間坊
 令夫人花牌で勝つたて寄附につき 病猩々
 (時事) 總艦隊ぶる／＼者で假泊する 久良岐
 (同) 葺の名山室山でほゝゑまれ 同
 出征の店子に大屋ちと弱り 中間坊

川柳久良岐点

鼻眼鏡英語混るが自慢なり 戰雨
 たな立てを手狭だなど、廣告し 秋天生
 走馬燈日本の兵は追て行き 美砂浦
 今度来た下女はどうやら式部式 寒貧坊
 談訃オワイを聞いてコラツ號外 不知火
 お茶碗を撫で、座頭はそつと呑み 不倒坊
 父ウ様は何所にと繪圖をかき廻し 鏡刀自
 晝は床の間夜るはお側へくる寫真 同
 損のやうに汽笛が鳴ると仕事止め 吞吐坊
 田ウコギの匂がするて嫌がられ 同
 號外の度毎地圖を塗りひろげ 水日亭

川柳久良岐点

かゝりうど闕跨ぐが思ひなり 柳子
 (時事) お拾ひの慰問で四膳めし上り 鏡刀自
 (同) 此所宜しくあつて露艦消え 不倒坊
 暑い時氷屋ばかり目に留まり 岐陽子
 父ウ様のお晝寝坊が馬にする 同
 今度からお灸ですよとこはい顔 同
 飯事の吳産物干の蔭へしき 同
 たべやうと見たらお菓子に蟻がつき 同
 (所見) 理屈いふ四十女の憎らしさ 久良岐
 (同) 夏座敷鶏ソツと忍び込み 同
 (芝居) 幽霊の芝居兎角に夏に出る 同

川柳久良岐点

走馬燈消しに來た蟲針でさし 岐陽子
 雨上り月は出たかと伸上り 同
 夏木蔭帽子で胸を煽いでる 同
 木のかげへ荷車入れて一やすみ 同
 蔕水がはねて袴の裾模様 同
 水蔕いて燈籠つけてドッコイショ 同
 唱歌をば團扇の三味で嬢うたひ 同

岐評 岐陽子の句、頗る詩趣に富む、ただ他のペランメー的俗調と撰を異にす、川柳の用は必しも熊公八公にのみ占有せしむべきにあらず、廿世紀の今日家庭的川柳方面を開拓するも、亦晋新川柳の一事業たり、今岐陽子の着眼此點に存するは喜ぶべし、而して吾社中諸君が各方面に向つて其特技を發揮するの必

川柳久良岐点

要を感じること切なり

奥様は辻(車)の虱をしよひ給ひ 久良岐

マツサジも供杯をこねてゐる 同

境論一ツ寸殖えたイヤ減つた 同

地境で口角沫を飛ばすなり 同

花嫁は席暖なるに違なし 錦 畝

蟲に餌を乳母は押へて入れさせる 同

(時事) 緑死病夏はオツだは悪い事 山 水

(同) 「七月一日より發賣」はきつい事 同

(同) 元山に屁をひのかけて露艦逃げ 同

(同) 最期屁を露艦矢鱈にひり歩るさ 久良岐

川柳久良岐点

酒飲はモ一澤山から飲みはじめ 雲 突坊

氷屋のつりは大抵ヒヤリとし 門 外坊

富士詣鈴をふりく音頭取り 不 倒坊

尋常科歸るとかばんほをり出し 同

伊勢参りすむと菩薩へかけつける 濱 千鳥

宣教師ある夜密かに松の塀 啞 竿棒

三十にして月給わづか十二圓 同

旦那此髯はドラシャシヨと床屋聞き 同

折詰を恭しく妻の前へ出し 幻 怪坊

教科書で教師欠伸を遮断する 啞 竿連字貫

自轉車の查公サベル邪魔になり 吞 吐坊

川柳久良岐点

演説會式部チラ／＼筆記をし 水日亭
 車上ヒラ／＼扇使つて驅けさせる 同
 思きや木蔭で右へと怖い顔 同
 黙讀に汗の滴たるランプ際 同
 洋服を着せてお袋店へ出る 同
 (時事) 御用船後門の狼にしてやられ 龜甫
 (同) 露清語の卒業千一の時機と云ひ 水日亭
 (同) 陥落を寢言に云ふは株屋也 久良岐
 富士登山先達丈は鬚を結ひ 中間坊
 煙草入忘れて來たと腰を撫て 同
 裸躰畫のはじめ子供が壁にかき 佐久良

川柳久良岐点

海水浴子一貴方泳がせて頂戴な 同
 繪をお呉れなど、角帽とりまかれ 同
 折だけを立派にしろと御注文 不倒坊
 共用栓あはて、鼻へグイと呑み 同
 肩書の名刺ほどには品がなし 水連門外坊
 ぶつさりの絲を嘗め／＼飴屋切り 思案坊
 見合さへすめばと仲人せき立てる 一波坊
 呉服屋の前で妻君二たごゝろ 金連伊三美
 先のちやん今度のちやんは眞理なり 金連さかゑ
 かけつけた仲人手持無沙汰なり 金比古
 蓮の葉をかぶつて脊ナ一釣を垂れ 同

(時事)

闇雲に無理な注文對馬へし

門外坊

(同)

今度こそといふ今度こそ又外づれ

水品

(同)

卒業生旅順陥落の思ひあり

山水

父う様の小言は夏の通り雨

水品

セリ呉服乳母が半分商ひし

秀耳

ハイカラーズボンの蚤に身をもがき

啞竿棒

釣葱船頭筏を宙で押し

同

お手が鳴るやうだと鯉が顔を出し

同

覗かれて式部ノートを顔に當て

同

號外を山の手丈は窓で買ひ

同

小便をつまらぬ顔で馬子は待ち

同

倫理の先生實行丈は但し也

竿蓮宇貫坊

人間の皮を背負つてく暑い事

久良岐

患者の屁公然とひる醫者の前

同

病人の屁を毎度嗅ぐマッサージ

同

小役人折のおもさで挨拶し

鼻赤人

立錐の餘地なきとこて大あぐら

吞吐坊

片影が出来てそろくお練りなり

同

店の者直つて當座ドンが付き

水連門外坊

浮氣より茶に浮かされる御年輩

同

水撒きは影のある中ウンと駆け

同

藤の花見る度び源氏思ひ出し

静香女

点 岐 良 久 柳 川

朝顔や朝なくに寝坊して 同
 月の眉少し曇るはいたましい 同
 これしきの根太と女房ウンと壓し 金比古
 根が出ると鬼の首でも取つたやう 同
 彼奴をと見せて此奴をせしめる氣 雲突坊
 セリ吳服大風呂敷を先つひろげ 秀耳
 熊谷は適齡前を志願させ 啞竿棒
 寫すよと寫真器出せば下女澄まし 文象
 坊ちやんのお靴をボチが鼻に穿き 同
 新聞で晝寝の顔を包むなり 同
 先生は子を取る子とろの親になり 不倒坊

点 岐 良 久 柳 川

木の蔭へアイスクリーム陣を張り 同
 鹿爪らしく式部聖書を讀んでゐる 同
 式部の攻撃お手柔かは曰くあり 圓角坊
 烏猫幅を利かせる水泳場 馬鈴子
 櫛釣つた中へ夜食の卓を据ゑ 金連さかゑ
 隠元は眞菰の帯をキユツとしめ 同
 白玉を紅葉やうな手で丸ろめ 同
 お爺さん番太郎とは誰れの事 同伊三美
 呼戻し尙子クタイを嫁直し 啞竿棒
 水撒けと戸毎にふれる暑い事 同
 水撒きは帽子の上へ頬かむり 同

川柳久良岐点

下宿屋へ半築城を文士据ゑ 久良岐

(時事) お母さん日本が勝てナゼ泣くの 宮坊

(同) 親なればこそ千人に頭下げ 吞吐坊

(同) 千人結びアバタの様に出来上り 同

(同) 對馬では烟霧過眼とも澄されず 柴舟

(同) 陷落を今やと賣屋伸び縮み 門外坊

(同) 西の海へサラリと鬼を將軍(キミ)攘へ 金比古

(同) 柿色の暖簾マサカに掲げかね 同

かもじをば頭に乘せてソラお化け 不倒坊

切つた木を枕に木挽ひるねする 秀耳

藥草に引かされ溝へすべり込み 同

白足袋の埃り扇子でチヨト拂ひ 同

腰白の下女海老茶をば穿つたり 圓角坊

河岸際をコロリカラリと夕涼 馬鈴子

十露盤屋至つて經濟不得手也 吞連仲間坊

根が生へてしまいましたと吞續け 同

長話遅くなつたと驅け出し 同

郊外で式部超然と寫生なり 秀耳

貴様では分らぬ主人が來いと我鳴 吞吐坊

俄兩日比谷で逢つてウロ／＼し 水品

手を舉げと云つて教員舉げて見せ 幻怪坊

ソハ／＼としても長尻ビクとせず 同

川柳久良岐点

川柳久良岐点

無盡なら屹度當ると護摩を焚き 金比古
 御歸館で御臺所を呼べば留守 四國猿
 夕飯がすむと式部はツイと出る 一波坊
 後妻既に姑となり海内を平定す 同
 無けなしの髭を撫でたり拵つたり 同
 月 落 鳥 啼 曳 馬 來 佐 久 良
 くつろいで和尚大黒涼まれる 同
 藪蚊はさす時一寸脚をあけ 南圓女
 お稽古の不首尾半玉泣てるる 顛臺師
 右に味噌こし左と背ナに一人宛 悟新坊
 召集兵はぎ合せたやうなナリと顔 臺灣坊

川柳久良岐点

太郎作に二等室から追出され 寒貧坊
 細君はきつと子供の年を聞き 金連伊三美
 印度ハイカラ木食などを奨勵し 同さかゑ
 辯護士の主張はいつも無罪なり 水日亭
 (時事) 玄子モの嗅日本を尻に敷き 久良岐
 (同) 鶏を割く牛刀いつも刃がなまり 同
 マサカに式部讚美歌などに候はん 水日亭
 讚美歌の鼻唄式部上手なり 久良岐
 學者の引越し本箱が五ッ車 水日亭
 本箱を荷厄介にする夏座敷 久良岐
 肩揚が目につく年と式部成り 宮 坊

点 岐 良 久 柳 川

頭だけ式部然たる下女を置き 戦 雨
 曲尺を廻して大工話をし 久 良 岐
 五ッ紋併し綿紹て里が知れ 玉 子
 南米の地理に明かるい受験生 久 良 岐
 エヘン將然已然連體連用終止言 同
 文法家ひひるひれてドット落ち 同
 羅行變格左行に加行ヤ、コシイ 同
 左の數題を説明せよと知らぬなり 同
 スカを喰はせ卑近な題を委員出し 同
 チヤンくの地名を出してまごつかせ 同
 善哉々々汝善い哉と下戸は喰ひ 同

点 岐 良 久 柳 川

居候好もきらひもあらばこそ 芝 比 子
 軍艦のお玩弄品敷居が航路なり 秀 耳
 お代りの來る迄坊は匙を嘗め 同
 歸省して一寸出るにも角帽子 竹 馬
 黄楊の櫛式部は由來美を知らず 門 外 坊
 田吾作の子は學問を致し過ぎ 同
 夕涼髯の一人は見すぼらし 雲 突 坊
 腐らせる積りか洗濯つけたまゝ 馬 齡 子
 網シャツの上から車夫は汗をふき 水 日 亭
 夏帽の鏢に手をかける橋の上 同
 (時事) 兜町旅順は疾うに陥落し 門 外 坊

川柳久良岐点

(同) 勿躰なくも御手をシカと握る也 水日亭
 (同) 涼いが風邪を引たとまんがちな 山 水
 (同) 電車では紳士市民の資格なし 同
 若旦那捕虜となるのを嬉しがり 濱千鳥
 例年の如くに今年は暑いなア 天秤棒
 賣出しの散らして伊勢屋壁を貼り 蛙面坊
 門口へ来てから伊勢屋羽織を着 同
 火事見舞消えた時分にガヤ／＼來 啞竿棒
 先生の叱らない日は月曜日 同
 瞞まされる顔は成程明間有 水連門外坊
 大痘痕庭石ならば美的なり 同

川柳久良岐点

ツイわき見式部の行方見失ひ 宮坊
 と聞かれて抑々これはアノ何んで 同
 演説はすれど浴衣が縫へぬなり 啞蟬坊
 茶箆筒のおサツ亭主に見出され 幻怪坊
 起されて下女立ながら腕をかき 文 象
 俄雨查公泰然として濡れて行き 同
 鴈カタル彌助つまんで大目玉 水日亭
 土産物歸る迄にはカラになり 雲水庵
 三尺で尻の楯取る車ひき 不倒坊
 襖一枚で奥様下女と早替り 同
 ドンが鳴り腹が鳴り耳が鳴り氣が遠くなり 櫻坊

川柳久良岐点

とつさんの甚平着けて蟬を逐ひ 金比古
 雉子案内猿はお側に犬は供 龜甫
 綱曳で金借りに行くつらい事 左久良
 酒呑は又戦勝にかこつける 馬鈴子
 腰衣然と袴を式部穿き 久良岐
 (時事) 山の手の國旗はポツリくも 水日亭
 (同) ハケ口が出来たか杯と尋ね合 久良岐
 (同) 嫁入が早くしたいと新學士 同
 背中をば拭きく親父諭達を見 竿連宇貫
 六區ではツイ樂隊に足が合ひ 啞竿棒
 ア、涼しいオ、涼いと橋の上 同

川柳久良岐点

團扇の柄喰はへて笠手で押へ 同
 端書をば猫にはましと入にやり 同
 雨宿りズボンの裾をまくり上げ 同
 大屋介に曰く子持と書生に貸す勿れ 同
 教員の留守黑板へ人の顔 同
 洗濯屋アイロンの香をムツとさせ 水日亭
 焼芋のかまどへ冠す浪の幕 同
 氷屋へお嫁に行くワと娘いひ 馬齡子
 賣物に花さと派手な浴衣着せ 雲突坊
 銀行員アツタラ髯を剃り落し 門外坊
 炎天にめげず角帽かぶるなり 竹馬

川柳久良岐点

派出所を自働電話と取ッ違へ 秀 耳
 涼臺下女はドツカと腰を据ゑ 芝 比子
 (横濱)新夫婦棧橋へ来て叱られる 久 良岐
 (同) 棧橋で白旗をふるはつらい事 同
 (同) お屋敷で横濱丈は通る也 同
 (同) ポンサンお前粹さだよと油かけ 同
 (同) ハイカラー先づお屋敷へ伺候する 同
 (同) チャブ〜と云つても江戸で笑はれる 同
 (同) お江戸ではチャブル横濱はチャブル也 同
 (同) 薄暗いところに關羽は鎮座する 同
 (同) チャン〜はステ、コ式で禮拜し 同

川柳久良岐点

(同) 料理屋に豚の丸煮がぶら下り 同
 (同) 本牧のトツ鼻へ来てイ、風だ 同
 (時事)生徒を苦しめた崇點數調べ也 山 水
 (同) 子が生まれ早速何々蓋平とつけ 同
 (換意)入學試験三回目にはソツと受け 瓢 奴
 エ、此字一つでと英文を睨らめつめ 同
 一十月の苦學ぢや試験ダメな事 同
 俄雨大工草履に齒をつける 秀 耳
 此雨ぢや油損だと早仕舞 同
 ゴム風船類もダン〜膨れて來 同
 受験生車上書見は駄目な事 顛 臺師

受験生時間が来ると蘇り
 同
 關ヶ原只斯一戰と受験する
 同
 話しよりいつそ身振があもしろい
 天
 鶏の鳴くのを小僧里で聴き
 同
 伯母さんに十錢貰らう豫算なり
 同
 然るべくウシホの眼玉ホジツてる
 花
 鬼子母神のやうだと嫁姆を悪く云ひ
 文
 ヨ澤山どうも戦争詩らしくなし
 久
 アラよくつてヨのヨの字新派はお好きなり
 同
 女の愚痴のやうな戦争詩出来上り
 同
 九里島歌にはちツと納まらず
 同

本降りて長ッ尻の先に根を生じ
 同
 川柳を引いて傘貸してやり
 同
 俄雨帯を包むが女なり
 園
 (時事) 此猛雨成程などと合點する
 山
 (同) 猛雨以後上村攻撃大分減り
 同
 (藪入) 千載の一遇などと小僧洒落れ
 同
 (時事) 葦屋の主人俄に蓄鬚し
 秀
 耳
 岐白 學生は智育一方に偏し、更に趣味教育の何たるを解せず、
 店員は實利一方に偏して、學界の事理に通ぜず、二者共に不具
 たるを免れず、従つて諸君の趣味狹隘、新川柳の取材範圍單一
 に流るゝ患あり、故に余は力めて其範圍の擴張を圖る、萬一余
 が句にして理解せざる者あらば、質問せらるべし、一々説明仕

川柳久良岐点

るべし▲定九郎を知らぬ人、キユーピットを知らぬ人あり、困
つた物に候、故に學生諸君は三馬風來一九等の著書を讀まれた
く、店員諸君は子規隨筆正續篇等を繙かれたし、傍ら日本文典
位の研究に従はれざるべからず、又古歌古俳句院本古小説等を
も知らざるべからず、二十前後の、社會も知らず歴史も知らぬ
青年が川柳をヤルは少しく大膽の氣味あり、徐々に趣味教育の
御勉強が肝心に候

(得) なものなりく、花やかな事く、
並べこそすれく、避暑)

- (得) 謙遜の實は甚天狗なり 芋生
- (花) ガラス屋の店はランプの花が咲き 同
- (避) 温泉へアイスは暑さもつてくる 吞吐坊

川柳久良岐点

- (得) 古浴衣いつか更紗の帯に化け 蝸牛
- (避) 故郷へはまだ平常衣のマゝて行き 日の丸
- (得) 姉さんの名を答へると物をくれ 宮坊
- (花) 植字歌唄つて活字摘まみとり 顛臺師
- (得) 名刺こそ僕の資本と出して見せ 雲突坊
- (花) 朝顔の露で嬢様紅をととき 秀耳
- 涼臺一番来いと盤を出し 啞竿棒
- 客が来て急に明くするランプ 寒貧坊
- 勘定を青錢で出す行脚僧 提嬋師
- 兵營の殘飯箆に二杯買ひ 幻怪坊
- 貸浴衣着て角帽は訪問し 同

(得) 義捐金僕は書生と退ける 岐陽子
 (並) 服薬は致して居ると薬壘 同
 (避) 土手で逢ひコ、へ避暑かと親治いひ 同
 浅黄幕切つて落せばヨ檜物町 金比古
 源氏から選手與市は馳せ出し 同
 (並) 戦場の義は是非なしを序幕にて 同
 六疊に五人て避暑は暑い事 同
 御法主へ随喜の涙捧げに來 水日亭
 花鳥山水扱は裸躰畫たて列ね 同
 汽車賃の直引かけ合ふ避暑旅行 同
 市民未だ醒めず朝貌賣に出つ喰はし 同

其實は嗅の里へ避暑に行き 同
 當にならぬ目的話式部する 圓角坊
 哲學者流石に戀は煩悶し(絶唱) 幻怪坊
 マツサジの需めに應ずと按摩書き 同
 棚經や念珠さらく揉んで行き(古雅) 同
 言はんすな私イ等て、水道使ふがな 同
 應接所先づクロベチャで怯しつけ 同
 へコタレチャ見ともねえと煽られる 天
 ハイカラ一分からぬトコは鼻でよみ 戰
 湯屋迄も行くに式部は袴はさ 同
 試験中丈は日の出の時を知り 雲突坊

受験準備先づ七ツ屋へかけつける 同
 縁日て摺違ッたが其始め 同
 水泳だ君禪を貸し給へ 日の丸
 幼稚園媒姆真中で目をかくし 匝竿棒
 讚美歌の唄ひ様まで牧師譽め 同
 葬式は時刻と墓地で人が出る 同
 門衛の此時こそと肩を張り 竹馬
 遅かりし悔悟の種がふくれ出し 濱千鳥
 ヤアレく明日は数理と獨逸なり 酒突
 ベルの鳴らんとする其顔や悲し 野郎
 答案がすむと教師を寫生する 同

漆かぶれ累がすむと小町なり 久良岐
 兵兒帯の解けるを女房氣にしてゐ 同
 (時事) 山の手の盆は精靈丈の事 山水
 (同) 食ひ物の中で素麵舊派なり 同
 (同) 新盆の涙は袖をしぼるなり 同
 水車とまつた螢廻ぐるなり 左久良
 夏休兄さんのお連れ先に來て 同
 姉ちやんと團扇の中へ話し込み 同
 落第生教師に譁りケチをつけ モモ目
 受験生覺悟極めて座に直り 猿島坊
 新盆の當り年だは苦がい事 日の丸

点 岐 良 久 柳 川

棚 經 を 端 折 つ て 坊 主 か け 廻 り 同
 土 用 中 獨 り 寒 が る 富 士 の 山 芝 比 子
 撒 き 水 の 始 め 柄 杓 で グ ッ と 吞 み 中 間 坊
 年 玉 の 手 拭 夏 に 引 出 さ れ 同
 座 布 團 の 上 に 半 分 畏 こ ま り 同
 獨 酌 で 尻 を ハ タ イ て 酷 ど い 蚊 だ 寒 貧 坊
 辻 車 蹴 込 の 上 で 華 胥 を 見 る 同
 捕 ら へ た 蠅 先 づ 羽 を ム シ リ 足 を も ぎ 同
 葡 萄 酒 を お 釋 迦 の 血 と は 名 付 か ね 圓 角 坊
 避 暑 旅 行 角 帶 ど う も 納 ま ら ず 水 日 亭
 (並) 序 で だ と 前 置 あ つ て 小 言 出 る 同

点 岐 良 久 柳 川

ゆ り 上 げ た 包 が 前 へ ぶ ら 下 り 秀 耳
 (勸 持 品) 人 間 を 輕 ん じ て 僧 は 法 を 説 き 金 比 古
 禮 盤 で 和 尚 お 布 施 の 高 を 讀 み 同
 稱 名 の 鉦 ど う し て も 眠 い な り 同
 出 水 の 門 並 障 子 洗 つ て る 同
 馬 の 前 さ も こ わ さ う に 式 部 避 け 香 吐 坊 別 號 な く さ
 手 配 り は 夜 討 の や う な 俄 雨 門 外 坊
 赤 々 と 水 瓜 の や う な 夏 の 月 不 倒 坊
 芋 書 生 御 歸 省 あ つ て 若 旦 那 雲 突 坊
 (時 事) 出 水 に 子 供 騒 い て 叱 ら れ る 啞 竿 棒
 (同) 藪 入 て 息 子 店 番 云 ひ つ か り 不 倒 坊

川柳久良岐点

(同) 日本海海賊船の運動場 山水
 土用干質屋でさせるつらい事 土佐坊
 物の直が上がる人直が下り 同
 五里霧中何とか答案がつくだらう 片破月
 美術家は先づモデルからハマリ込み 同
 自轉車の下手は輪廻に迷つてゐる 芋生
 朝寐坊晝顔よりは早く起き 櫻坊
 切符色の帯を客車はべてゐる 同
 避暑だとして腰帯一ツは餘りなり 左久良
 御免下さいお神樂見たやうななりで 啞竿棒
 そりやドンと時計を合す居候 同

川柳久良岐点

散歩なら草でも取れと親治云ひ 同
 先生が女の人と歩るいてよ 雲突坊
 藝者の様で入らッしやるとで母得意 同
 妻は縫ひ主人は書見下女は漕ぎ 同
 水撒を睨めく雪駄通る也 喜樂坊
 受験生マサカに頭抱へかね 秀耳
 俵への馳走春から親治蒔き 蝸牛
 大枚の受験料度々フイになり 寒貧坊
 藪入の麥稈帽子マゴくし 水日亭
 ハンドルを片手朝顔ぶら下げる 同
 華嚴の瀧覗けば巡查コリヤと云ひ 幻怪坊

(益) 父うさんの杯と供物を坊や喰ひ 同
 精靈へ西洋桃など先づ供へ 久良岐
 蓮の葉で精靈の座は狭められ 同

(第二回川柳會の記事) (幹事報告)

幹事は着々豫定の行動を整備し、爰に明治三十七年七月十六日
 綠蔭露滴る上野公園忍亭に開會候此日炎帝の特に猛意を寛恕せ
 られたるは會集者の爲に甚だ多幸にて候窓外疎簾を徹せば不忍
 の荷風徐ろに吹き來り清涼亦得も云はれず候正午頃より來集金
 比古吞吐坊水日亭宇貫坊啞竿棒願壺師寒貧坊秀耳一波坊樂雅喜
 宮坊雲突坊芝比子 (種別尊黨一袴黨七前掛黨五) (着順) の十三
 君に候一時水日亭開會を告げ久良岐先生殿正に撰評せられ候課
 題開卷を行ひ候結果

(星位) 先妻は無疵の様に後妻聞き 門外坊
 (月位) 思ふ事溜つて啞が手てはなし 啞竿棒
 (日位) サアベルを足蹴にするが新少尉 同
 (人乙) かあちやんと仰やいゝ子よと後妻云 伊三美
 (人甲) かあちやんと云はれる方が年がした 雲突坊
 (地位) 小説を隠して後妻ため息し 秀耳
 (天位) 親類の子供後妻の疑問なり 同

秀耳君萬歳の聲起り榮譽羨むべく候次に久良岐先生出席にかへ
 らるゝの講演を期讀致し候言々句々一字一書其病める先生の肺
 腑より出てたるの熱血は注がれて頭上にあり候會衆密に涙を呑
 んで將に前途の奮進を期せられ候 (此は別に川柳講談として別
 に掲載可仕候筈) 其れより啞竿棒君の川柳に於ける一部の成効

川柳久良岐点

談あり蓋し同君近來飛躍の原由を傳授され候次に金比古君の失
敗譴責談あり森嚴にして然も滑脱會衆皆泣き且つ腹もかゝへ候
次で水日亭の川柳に於ける意志變遷の自狀あり其れより質疑應
答陸續起り終に笑聲に終り候餘興として即吟課題（風鈴、團扇、
公園）を得て一時間を期して作句致し候思を練り想を凝らし其
間致て一語を發する者なく候互撰の結果

(十五點) ロハ臺て天下の志士が寢て御座る 一波坊

(同) 風鈴がしきりとなつて高いびき 水日亭

(同) 風鈴の中でちんく 錢一つ 吞吐坊

(十七點) 絹團扇かくした顔がすいて見え 秀耳

(卅四點) 團扇の手やむと坊やは寢返りし 水日亭

何れも喝采に結び候次に社則訂正を議し新に入會加盟の申込七

川柳久良岐点

君を得候終て茶菓を供し至極の圓滿笑聲裡に此會を閉ぢ候時に
午後七時其れより有志の七君久良岐先生宅へ大要報告辭して晚
餐を俱にし兼て懇親を結び各歸途につき候最後に臨み本會に就
ては金比古君は會場整備及會計に吞吐坊君は書記に啞竿棒君は
接待に非常の熱誠を以て盡力せられ候事を感謝致し候以上（水
日亭記）

いゝ子だね彼方へお出でと頭なで 芋生

清盛は藥罐に湯氣を立てゝ死に 同

マアゆつくりおシヤスナーと帽子出し 同

鉢合してゐる中に蚤は逃げ 同

押へたと揉めば四五尺先を蚤 同

陰に外し陽に開いて蚤は逃げ 同

川柳久良岐点

疊目に尻ツン出して蚤かくれ 同
 肩揚げの中はかゝさず歸省をし 啞竿棒
 歸省中無理に踊へ引出され 同
 試験場炎のやうな息をつき 同
 出来ぬヤツ矢ツ鱈問題を質問し 同
 試験前角帽所ぢやなくツてよ 同
 救世軍薬師の前へ陣を張り 同
 縁日の尻ツ尾にいつも飴屋が出 同
 立見場は能く見え出すと幕になり 同
 洋傘の先で道をば教へてゐ 同
 初鯉より牛肉の方がウマかゴツ 同

川柳久良岐点

一錢蒸溜出口で坊主ゴツンなり 同
 網シャツの角帽ポト漕いでゐる 柳左衛門
 棚経や坊主ゾロく這入つて來 茶山
 母嘗て戀愛神聖論者なり 幻怪坊
 學問がお江戸に落てる様にいひ 宮坊
 新盆の佛は長く御逗留 秀耳
 にしいつけえらしやつたと云はれ苦い顔 岐陽子
 大男半人受験いやだ事 同
 美術家の妻でないかと叱られる 同
 美術家はモデル拾ひにノツンく 同
 美術家の畫室戰場見たよなり 同

耳へ来て蚊は殊更に聲をあげ 久良岐
 足の裏藪蚊にさされ足摺し 同
 裁縫の委員氣付を持參する 同
 汗臭い養染のやうな白衣なり 同
 もう一聲などしセリ屋は手を合せ 一波坊
 ハイカラー能く見れば齒磨屋 同
 女易者先づ手を掴み顔を見る 同
 水泳の受験すんでに死ぬところ 同
 憎らしいよつと蚊遣を煽りつけ 同
 肅然と檀家は涕を吸りあげ 秀耳
 式部の移轉これが墮落の一步なり 戰雨

芝居では捕虜が日本語上手なり 同
 チエー残念螢を月にばひ取られ 蝸牛
 (換意)待合のおかみは上意蒙りて 同
 受験前兎角食事を叱り付け 同
 避暑先へハヤクカヘツテクダサイとかけ 同
 歸省中農科は依然鋏を持ち 櫻坊
 手水鉢の水がないぞと叩いてる 馬鈴子
 小便をしかけて蟬はツイと逃げ 同
 歸省の出迎へ先づブチがペロくし 芋生
 手の平に細く書くはつらい事 同
 掛取が来るたび且那避暑に行き 日の丸

川柳久良岐点

岐白 「縁日へ冷かしに行く熱い意志」 「水心あつて水兵捕虜となり」 如此形式上の小刀細工は絶對的に排斥すべく、度々猛省を仰ぎ置しに未だにかゝる投句家あり此の弊を知らざれば百年経つても正風に歸せんこと覺束なし、注意あれ

二人乗藪入 スポツと一人乗り 文 象
 石段の半分丈で風を入れ 同
 丸木橋片足のせて試みる 馬鈴子
 魚籠の中覗いて見れば釣を垂れ 同
 浮子動ざると一時間にて場所をかへ 同
 盆踊與作海老茶を着けて出る 圓角坊
 躰育家二日酔とは申しかね 天 緑
 へげる程塗つて相摸と卑しまれ 同

川柳久良岐点

轉寢の尻を扇で二度叩き 同
 普茶料理鈕を叩けば給仕が出 同
 夕方の電車で藪入皆んな漕ぎ 玉 子
 お手當が好過ぎ朝貌萎れてゐ いなづま
 職人だなどゝ馬鹿にはしめえもの 同
 上首尾が高じて店員首にされ 同
 有料便所惜しいけれども仕方なし 大 灣 堂
 本尊の前へ来てチヨト目禮し 蝸 牛
 改良服町内丈は傘を低れ 水 日 亭
 掏摸十九遺失物八喧嘩十 久 良 岐
 小言云ひくカビ卷蕨呑んでゐる 同

川柳久良岐点

(時事) 東航覺東なし然れども 山水
 (同) 紅海の街道筋へ定九郎 同
 (罵倒) へボ川柳覗外れを毎度撃ち 同
 (同) へボ川柳餘韻もクソもあらばこそ 同

(第二回川柳會即吟五撰句集再撰)

(辰) 公園のかげで禪しめ直し 水日亭
 (星) 夏のロハ臺尻を据ゆれば欠伸が出 寒貧坊
 (月) ロハ臺へ頭を下げて端を借り 水日亭
 (日) 公園へ來ると新聞直が下り 同
 (荒) 團扇から兎角楊子を製造し 宇貫坊
 (洪) 團扇の手止むと坊やが寐返し 水日亭

川柳久良岐点

(宙) 澁團扇舎長が例の御説法 一波坊
 (宇) 團扇バタ〜此所だ〜と暗て云 同
 (黄) ロハ臺で天下の志士が寐てムる 同
 (黄) 風鈴の下へ泣兒をさし上げる 水日亭
 (玄) 簀戸の陰團扇でも出〜をし 啞竿棒
 (地) 熨斗の儘コリヤ能い風と煽いで見 秀耳
 (天) 廣告の目立たぬ團扇客へ出し 水日亭

岐白 社中秀耳君、雑誌文庫の餘材片々に就いて憤慨せられ候
 得共、川柳を文藝として認めざるは、目下の通弊に候、而して
 罪は作者と局外者と双方に有之候、是れ吾人が文藝上の川柳を
 絶叫し奨勵して、川柳の名譽回復を圖り、文藝上の待遇を文壇
 に要求しつゝある所以に候、或る種の戦争文學としての川柳の

川柳久良岐点

如きは、餘材子に譽められたのには無之候、蓋し戦争文學の四字は際物的の意味を有する者に有之候へばなり、要は川柳に對して五里霧中の現社會に在りては、群俗川柳中に高く吾文藝上の新川柳を興起せしむるに有之候、世の盲評に關せず一同作句を御勉勵被下度候

三度目のベルでそろく告別し 吞吐坊

朝顔賣朝ツばらから冷かされ 同

隣席をジロく見てはフオーク持ち 名草

本借りてランプ持込む蚊帳の中 八軒生

借金を目鼻を盆に附けて行き 金増

叱られた其夜宿への用が出来 水日亭

税關吏面白がつて荷を解かせ 文象

土用の入大のお灸をすゑたやう 久良岐

(時事) 南山のキワダ管めると摩天嶺 山水

猿廻し半分犬に手傳はせ 啞竿棒

朝歸り電車へ乗ると高いびき 同

乳母車箱根の山で曳はじめ 同

派出所の硝子ユワく覗いて見 一波坊

廣告の大提灯が歩るいて來 同

癩癢の當り始めは鼻をかみ 同

泳げない監督小言ばかりいひ 同

水練場女の泳ぐ暑いこと 同

鼻の先こすると次ぎがタンカなり 同

川柳久良岐点

川柳久良岐点

ケークの名ミルクホールで覚えて來 雲突坊
 白雲が今ぢやあ店で光るなり 金増
 赫耶姫然と竹取讀んでゐる 芝比子
 面白いと今日も芝居へ泣に行き 大灣堂
 物思ひフワ〜として二三丁 戰雨
 ショツテスのダンスを盆踊式でやり 文象
 腰巻をしたで平凡畫を人が知り 櫻坊
 佛頂面で箔屋どの叩いてる 天綠
 吞氣まで云ひ立てられる暑い事 同
 蚊帳の裾大きな蚤が首を吊り 秀耳
 ハンモツク餘り高いてまご〜し 同

川柳久良岐点

盤の横碁石で叩き〜うち 同
 とは知らず底が抜けたと教へかけ 水日亭
 素人の琴唄兎角ふやけてゐ 久良岐
 素人の手琴はいつも蹴つまづき 同
 (時事) 津輕海峽抜けて見たれは見たれ共 山 水
 (同) 撲つちまえと云へど前田はロシヤにゐる 幻怪坊
 待合で犬と見られるヒヨンな事 岐陽子
 葎戸越し不行儀なのが見える事 同
 あの家は下女の替るが早い事 同
 女床痛い位は懲りぬなり 同
 そうだらうウムと自分で返事をし 同

点 岐 良 久 柳 川

お暑いでせうがとヤドを使ひなり
 同 墓参ついで隣まで掃除をし
 同 母様の坊よと父に念を押し
 同 授業中足の楽隊ををつとし
 同 お時計が有そにリボン巻つける
 同 いやな奴見える限はふりかへり
 同 講談師大將然と客を見る
 同 太つてう据りがよいと誰れかいひ
 同 借着して似合升かと客は云ひ
 同 どの子でもトンビが鷹と母思ひ
 同 琴の手が止まると起こる客の世辭
 同

点 岐 良 久 柳 川

動き升！電車地震のやうに振れ
 同 無性者四五度はたいて丸く掃き
 同 氷屋でモウ一杯を母は睨め
 同 人立がして立てば乞食なり
 同 車屋を焦らしながらも小半町
 同 刺り物のある叔父さんを湯で覚え
 同 判事殿芝居お好きで白フめき
 同 表札が女だつたて覚えてゐ
 同 寫真顔よいも悪いも云へぬ義理
 同 侍んべると英語と交じるおん手紙
 同 電車中買物一寸ほどいて見
 同

川柳久良岐点

午砲汽笛と同時に時計十二うち 同
 涼臺山盛一パイ小供乗り 同
 橋の下涼しくつても御免だね 同
 そろくくと瀧にうたれてキヤツと逃げ 同

岐白 岐陽子の句着想精密行句流麗、再誦に値する者多し、未だ俄に許すべからずとするも、萬縁叢中紅一點の感なくんばあらず

又曰 近來投句中「豆ランプ蚤取つて入れく」「ニキビを押すと穴が明き」及び禪、口臭等一見胸悪しくなる者往々有之、文藝の要は假象美に存す、實感悪感を挑發せしむる者は皆文藝の賊と云ふべし（但禪と雖も滑稽想化したるは亦可なり、誤解すべからず）

お嫌ひな酒を花嫁九盃呑み 鈴 成

川柳久良岐点

飼犬に午寐の頬を嘗められる 同
 糠味噌も三舍を避けるアセチリン いなづま
 宵越しの錢を蓄めるが明治ッ子 一波坊
 朝顔の窓で化粧は眠い事 同
 洋食も橋畔式は下されず 仲間坊
 自働車が來たて親父は話やめ 名 草
 初行商一聲呼んで見たれども 圓角坊
 駈けて行く尻を夕立ハスに打ち 日本坊
 坊ちやんは御飯になると小便し 同
 繭買はスグと十露盤パチくし 同
 仕立屋で着更へて店員外へ出る 櫻 坊

川柳久良岐点

ハンモック尻でゆりくさわいでゐ 秀耳
 どうしたと聞かれ子供はワツと泣き 同
 図書館へ晝飯喰に一寸寄り 不機嫌
 湯治場は共同三階ばかり建て 久良岐
 山駕籠で病人然と登山する 同
 大胡座パチくひくは暑い事 同
 大胡座客車の中は憎い事 同
 交通の客車を部屋と履違へ 同
 云はゞ天下の往來で大胡座 同
 己れ一人買占め面が避暑に来る 同
 見え坊と天狗引つれ避暑をする 同

川柳久良岐点

名譽でもないに避暑だを鼻へかけ 同
 避暑通をふつて番頭呼付ける 同
 別荘の實は貸家で十五圓 同
 只今は御多分にお茶代をなど頭下げ 同
 腰帶で廊下をバタリく行き 同
 暇あれば湯浸しになるケチな避暑 同
 手拭を下げてノソく降りてくる 同
 温泉は畑徳利のやうに入り 同
 餘り湯が透明すぎて縮むなり 同

岐白「川柳を讀んで歸道おそくなり」「僕の句の出た新聞は大事にし」「撰ばれた句逢ふ人毎に出して見せ」等は皆川柳仲間の樂

川柳久良岐点

屋落に過ぎず候、かゝる狹隘なる句は悉く排斥致し候、御注意
被下度候

鹿島みやげ(其一)

萬丈の紅塵あとに都落ち 水日亭
 忙中有閑閑中の忙さて如何 同
 椀白が今朝一聲で起き上り 同
 出立の足へ椀白かぎり付き 同
 海水に行つて父うちやん何喰べる? 同
 白銅の賄路坊やは承知せず 同
 老親に留守居を頼むつらい事 同
 先生を駄句責にする旅行なり 同

川柳久良岐点

赤帽に三等切符と小聲なり 同
 旅客の手荷物何の恨かぶん投る 同
 構内の石炭山へ橋をかけ 同
 ヤードメンよろしと云つて旗をふり 同
 汽車旅行書物讀めぬが能く喰らひ 同
 二等車の肱掛いつか枕にし 同
 一欠伸してから眠る汽車の旅 同
 鐵橋へかゝると首をひつこめる 同
 賣聲が停車場毎違つてる 同
 海老茶穿く年頃なのに肥料桶 同
 村社にはお立派過ぎる石鳥居 同

川柳久良岐点

汽車の窓青田十里のびくし 同
 田吾作が二等車あけて這入るッペ 同
 トンネルを越して新聞読み忘れ 同
 女馬士流石に小言静なり 同
 田草取此炎天に蓑をつけ 同
 下りる時浴衣の油煙先づハタキ 同
 小休の所が汗で湯に這入り 同
 土浦で刺身の山葵縁が切れ 同
 お手の筋云はれて茶代奮發し 同
 お手の筋其筈荷札讀んできた 同
 杯洗や酌より外に人のなき 同

川柳久良岐点

三膳目早くも立つても茶を入れ 同
 四膳目はしよること無しに手盛也 同
 上等船室満員に付甲板なり 同
 湖上汽船貧坊搖ぎみんなする 同
 門を過ぎれ共入らずとは行かず訪問し 同
 里の無事先づ聞きながら汗を拭き 同
 岐白 川柳の連作蓋し水日亭の先鞭に属す、一種の趣味棄つべ
 からざる者あり況んや其行程中の山川風物悉く川柳化せらるゝ
 に至つては水日亭の能才已に多とするに足る
 半天の裏を肴屋着て歩き 秀 耳
 手探りで摘まんだ蚤を見れば垢 同

点 岐 良 久 柳 川

網の魚宜しくあつて寐坊起き 同
 靴草鞋下駄も雪駄もみんな避暑 同
 新鮮の空気がいやで上京し 同
 カムダウンなどゝ二階を見て吐鳴り 同
 料理より風呂を當込む夏の客 同
 讚美歌で罪ある人を呼びつどへ 同
 いゝ風だ！襟を擴げて首を出し 同
 坊ちやんのお辭儀角兵衛と云ふ工合 同
 氷室涼しいよりはガタ／＼し 不 倒 坊
 海拔一萬二千尺太平洋を水鏡 左 久 良
 柳經に式部殊勝に坐はつて見 同

点 岐 良 久 柳 川

伯父さんにお手々お見せと種痘をし 柳左衛門
 雪隠の世話迄やいて藪醫行き 啞 竿 棒
 後ろ褌とるが巴里の藝者なり 同
 フロツクのプロツサキ分けて腰をかけ 同
 ソリヤ蛇じやソリヤ鰻じやと男瀧 天 緑
 お茶茶羅で人に知られし男なり 同
 朗かな吟詩は例のドモリなり 同
 出来さうに話すは例の周旋屋 伊 左 三
 婆々様のお菜迄坊蝨食し さ か ゑ
 お影で及第先生様々で式部嬉しがり 一 波 坊
 先生は僕ばツかりを睨らめてる 同

川柳久良岐点

學者一代書物の屑を喰つて活き 芋 生
 蓄音機金切以上に進歩せず 同
 船頭は輝のあとを背に染める 水 日 亭
 舟を出す許りて酒を呑みに行き 同
 磯で見れば入日ピヨコンともぐる也 同
 雛様の武器らしい道具齒科醫出し 久 良 岐
 口をアーンとお明きなさいと齒科醫云ひ 同
 (時事) あの烟は露艦だらうと磯評議 山 水
 (同) 御慶の時だけ系圖名告り出で 金 比 古
 精しくは宅でと易者逃げを張り いなづま
 即刻只今から改めるとは云はず 十 笑

川柳久良岐点

電話口喰つた麥粉でモグくし 茶 山
 主人無口細君能辯客ポカン 片 破 月
 揚々と式部ベタルを踏んで行き 同
 女湯は鏡へ腰を据ゑて撫で 不 倒 坊
 ロハ臺で千人結び頼まれる 支 良 久
 そつと来てワツと云つたが人違ひ 同
 其脇へかけると讚美歌共に見せ 同
 ポールより五間も先へ靴が飛び 耳
 病上り錢湯の隅でソツと浴み 同
 棍棒の體操チヨイと首締め 同
 居酒屋の腰掛ころがして持つてくる 同

川柳久良岐点

鳴くだんべソラあの聲が子規 水日亭
 田舎者ぶつきら棒の世辭を云ひ 同
 游泳の河童は家根で甲良干し 文象
 禪で顔を拭くのが游泳場 同
 下手な奴蒸汽の浪をガブリ呑み 同
 游泳の河童禪下げてくる 同

岐白 從來似而非新派の攻撃のみ致し、舊派の如きは自然消滅する者故打捨て置候が「菊の根分の日に殖える新領地」の如き投句あり、これは「文藝界」の地に「撫子に置いたが露の無分別」と同様にして、譬喩の最平凡なる者にて、内容何等の趣味なき俗句に候、舊川柳の弊は此點にも存在せり、尙追々説明可仕候▲某撰者の「日本沿海の制海權はとロスぬかし」何等の没

川柳久良岐点

女湯の餓鬼を親治が叱つてゐる 一波坊
 水槽の所で女房を呼出し 同
 兩親のシャボンの傳令使子が勤め 同
 水槽のところからシャボンによツと出る 同
 乞食の子瘦せて居る程幅が利き 同
 其時熊サン少しも騒がず溝へ落ち 信州山猿
 拳骨を自分の腕へくれて見せ 同

趣味ぞ、餘韻の何たるを解せざるも甚だし「ロス卑怯弱い相手に強くなり」平凡淺薄何とも申様なし「向後指も差しやせんと英へ詫び」三句ロスぬかしと同一の病點にして結句へかくの如く窮屈なる俗惡調を用ゐられ候は、獨り此作句家のみならず、近來の通弊に付、一言驚かし置き候

川柳久良岐点

お店者困つた様に畏り同
 枝豆を喰ひく涼む瀧の茶屋天緑
 高襟ズボンの銀貨ちやらつかせ戦
 背負つた子を一揺りゆつて立てうず水日亭

(時事) 馬鹿雷めまごくせずと露西亞へ行け

劍岳

(同) 桑原の立つづけにて縮こまり

山水

岐白 谷中一閑生の投句「愚に付かぬ新柳種愚には付き」「重要欄新柳種占領し」「クラキとは嘘其實クラマ也」とあり、モト一笑に値せずとは申せ、或る一部の讀者に此意ありとすれば、一言の要可有之候、文藝は實利より見れば愚に付かぬ者に候、愚に付かぬ者故實利より貴重なる者に候、酒や茶は飯の足しにもならぬもの故趣味あり、糞を呑んで往來をあるくと、菓子喰つ

川柳久良岐点

てあるくとは同一の事なれど、糞は愚につかぬ烟丈に人も許し候、其他世間の半分芝居美術をはじめ皆愚に付かぬものに候、古人も無用の用の大なることを説かれ候、無用の用がお分りになられば、川柳もお分りにならぬことに候、又重要欄に付いても、重要といふことに議論可生候、小子は戦争が盛んなれば買けず吾國に缺乏せる滑稽文藝を新に起すを以つて、非常に重要な事と確信し居候、一家にて申せば壺所茶の間の重要は申す迄もなければ、紳士としての資格を有し候には、お座敷や書齋の美術品圖書等及社交上の必要品も甚重要なる物と信ずるが如くに候、大なる日本帝國としての資格を備へ候には、一つでも新しい文藝の普及されんことを企て候も、決して無用の義には無之候、又クラマの句は天狗と自信とを混同して御觀察に相成候やうに見受け候、少しくお氣の毒の至に候

鹿島みやげ (其二)

川柳 久良岐 点

眞つ黒で無い子はお辭儀上手なり 水日亭
 村の旦那株草刈籠を背負て来る 同
 歟二三度うなへば顔の汗を拭き 同
 先へ出て軍歌を唱ふ餓鬼大將 同
 汽船ついで書見の頭持上げる 同
 妻を貰つて米の成木をやつと知り 同
 田舎市場汽船の笛で旗を樹て 同
 ゴム楊枝つかひ湖水でうがひする 同
 湖水べり馬引き入れて一寐入 同
 茶を出したボーイは其實菓子屋なり 同
 川止の棒杭ありて汽船つき 同

川柳 久良岐 点

女一人乗合舟の座のひろさ 同
 佳い女潮風染のお顔なり 同
 豈圖らんや女程なく巻煙草 同
 眞菰かげチラく見える緋の布團 同
 帆をかけて漕しめてサテ菫 同
 帆をかけて乗合舟の錢を取り 同
 叱りながら小便布團乾してゐる 同
 あまつ子は緋金巾などで泳いでる 同
 ハンケの下チに眠るが女なり 同
 船頭は悠然として錢を取り 同
 香取様の四角な杜をふし拜み 同

川柳 久良 岐点

濱さ迄御運動よと澄しこみ 同
見に愛想時計のねちをかけさせる 同

岐白 水口亭、旅中の見聞悉く川柳藥籠中の物と化す、亦多才と云ふべし、只往々俳句に近き者（只季の無き事と俳句より少しく活動せるとの相違はあり）ありと雖も、モト天然を主とせる田園の記事なれば、必ず市中の定木を以て律すべからず、且旅行の詩歌多く寫實を主とするが爲め、趣味一部に傾くの弱點あり、これ讀者先づ頭中に鹿島附近の地理を置いて、之れを讀まざるべからず

安いからどうせと慾が手を出し まとまる
オイコラと云はれ急いで肌を入れ 同
向ふ臍さすつて車呼んでゐる 同

川柳 久良 岐点

手遊屋は先づ喇叭など吹いて見せ 柳左衛門
ヨイシヨと扇子で額叩いてる 同
穴守の信徒いづれも狐狸の類 同
夕立が來たて庭行水傘をさし 日本坊
電車では男黨女黨睨み合ひ 松月生
やらんやりやるやれやらうもらひましよ 山 猿
鬢さんは他所見しいく顔を剃り 同
夜目遠目式部深張傘の中 いな妻
口角泡を飛ばすとはビヤホール 同
黒襟してる河童の御大將 同
新學士只憾むらくは髯がなし 片破月

川柳久良岐点

瓜畑の番小屋蚊帳の吊ばなし 蝸牛
 田舎道聞く度ごとに遠くなり 同
 ガラン／＼スワと切符の小手しらべ 同
 豆腐屋は先づヤッコにて試験され 伊左美
 お盛物今日はあるかと覗いてる さかゑ
 大うツきな蜘蛛かと思たら蚊帳の蟹 久良岐
 襦の皺に海水の砂だまり 同
 兩國の風呂に似たのが海水場 同
 寒暖計七十度山ぢや避寒を訴へる 同
 涼しいがコリヤ怠屈でやりきれぬ 同
 躰のいゝ島流しだと山で云ひ 同

川柳久良岐点

温泉料理うまに鹽焼玉子焼 同
 長椅子の樽天王に女唐乗り 同
 國民の懶惰が目立つ温泉場 同
 靴の上草鞋を着けて毛唐行き 同
 山荒し土曜に来るが塔の澤 同
 温泉場五百羅漢が避暑をする 同
 (時事) 雷で家内中帯をメ直し 天
 (同) のう喚朝鮮へ行つて茶ヅろるか 同
 へポ自轉車坂の有無聞いて置き 久良岐
 洋服の自轉車式部猫の踊といつた風 同
 引導を受取つて出る普茶料理 同

点 岐 良 久 柳 川

普茶料理亡者バクくやつてゐる 同
 戒名を何と付けうと普茶料理 同
 普茶料理ユニテリアン式で麥酒なり 同
 普茶料理塔婆に電話記き入れる 同
 考一考酒を命ずる普茶料理 金比古
 濟まねへの百曼陀羅が跡て出る 同
 萬歳に酔つて大將腰が抜け 同
 冷かしちやいやと式部はひん丸め 同
 いさかいてもコレサくでやめりや無事 同
 韋陀天に乗つて姫イ様御通學 幻怪坊
 吸殻を車窓へハタク田舎者 同

点 岐 良 久 柳 川

でもマアお仕合でと火事見舞 同
 年々歳々相同じ湯治場の案内 同
 夏座敷火鉢は始終邪魔にされ 同
 戦死者の葬儀ピードンで祭り上げ 同
 哀悼に堪へずと弔詞丈の事 同
 弔詞とは氣の毒そうに書いた迄 同
 忠魂はやかましいので浮びかね 同
 奥様はそゞろ歩きがお好なり 同
 新夫人座敷をドタリバタリ行き 同
 安普請聯を四方へかけておき 同
 朝鮮カラー洋杖代用の煙管持ち 同

川柳久良岐点

萬歳聲裡ビィガタリシユツクタツタタ 鈴 成
 茶ぶ臺てたつた一人は廣い事 同
 菓子片手國旗片手に坊は寐る 圓 角 坊
 踏切は飯喰かけて旗を出し 不 倒
 お幾つと聞かれズウスツ(十七)と式部云ひ 文 象
 土用干絹物丈は窓へかけ 同
 (時事) 公時の公が禽獸の禽になり 山 水
 (同) 黒鳩は肩を抑へてあとずさり 同
 (同) 大道で糞ひりながら喋し合ひ 水 日 亭
 (同) おだてれば大韓國とつけ上り 同
 郵便屋ポスト見えると驅け始め 秀 耳

川柳久良岐点

大欠仲牧師はキツト睨らめつけ 同
 浮棧橋蒸気が着くとゴトリ揺れ 同
 父う様の不機嫌母が目で教へ 同
 朝貌へ目が覺めからと約束し 同
 お叱言は併し迄來て腰が折れ 同
 傘買ひに寄つてる中に雨がはれ 同
 尋常科荷馬車の跡へ吊り下り 啞 竿 棒
 退屈をすると巡査は髻をより 同
 お客様歸ると折は検査され 同
 よぼ車支那商人が常お伴 同
 洋服の胴が長いでチャンが知れ 久 良 岐

川柳久良岐点

留學生劉寓杯と標札し同
 西瓜の核幾度やつても嚙潰し同
 支那のお茶、蓋で押へて啜り込み同
 チャハア、チャンガチャガくと話してゐ同
 新聞の延着膽のいれる事同
 汐風の鼻につくのは九日目同
 此雨ぢや泳もならず大欠伸同
 東京が馬鹿に戀しい避暑の雨同
 避暑に来て不便を云ふは飽きた頃同
 タ立で顔の白壁半ば落ち青葉
 富士登山七分は汽車と馬車と馬大灣堂

川柳久良岐点

阪井さん郵便！杯と投り込み久良岐
 焼豆腐然と卵子を焼いて出し同
 ポンチ繪のお日様のやうな坊が顔園子
 鹿島みやげ(其三)
 古肴焼く香のするが駐在所水日亭
 小便をしながら漁師雲を見る同
 沖の浪モコくくと押寄せる同
 山道に出ッばる萩を車夫は避け同
 雁首の焦げた煙管を出してくれ同
 濱風に帽子のリボンひらくし同
 田舎女給仕におつう首を曲げ同

点 岐 良 久 柳 川

濱へ来て濃霧研究おつはじめ 同
 新聞を晝寝の側へソツと置き 同
 濱へ来て肴何でも刺身にし 同
 足袋はだし馬糞を飛で濱へ行き 同
 細君の郵便先へ封を切り 同
 話しながら筆記するので厭がられ 同
 單物重ねる夏の濱の雨 同
 初茄子兒を持つてから門へ下げ 天
 彌太一で露艦手捉りの噂なり 同
 阿彌陀鬮袋を背負うと逃たがり 同
 自働車に嬢は浴衣で召されたり 同

緑

点 岐 良 久 柳 川

行水の湯迄賣るのが本所なり 同
 オイ行水屋さん二荷置いてツてくんねえ 同
 (寄水兄) 禪のあと丈白い河童の子 同
 (同) 鹿島立途中宜しくのたり行き 同
 催眠術睨みつけたり摩つたり 宮
 名で判断美人らしいがあかめなり 同
 彈奏の名手らしいで眠いなり 同
 (課題一寸した事、眞なりけり、太い事かなく、
 尋ねこそすれ)

坊

坊

(一) 泣くなく日本男兒ぢやこれしきに
 (眞) お姫い様御寝ンになると涎れ姫 同

点 岐 良 久 柳 川

- (尋) 試験前大の男がペコ／＼し 同
- (一) 避暑先の戯談遂に駒を出し 秀 耳
- (尋) 交番で聞いてごらんと澄ましてゐ 同
- (同) 其手紙なくして式部落付かず 雲 突 坊
- (一) 素人義太泣くも笑ふも區別なし 圓 角 坊
- (尋) 冷かしは店に無い品許り聞き 同
- (一) 様子をば覺られまいとニッコリし 岐 陽 子
- (尋) 泣かずとも譯を話せと甘い親 同
- (同) 御用件伺ひませうと畏まり 同
- (同) では彼の娘と定めて置いて探り入れ 左 津 岐
- (同) 一足は先へ乗り込む里返り 同

点 岐 良 久 柳 川

- (太) ハツクション思ふたんびに逢れるか 同
 - (同) 暇潰し説諭と迄は名がつかず 水 日 亭
 - (同) 入口は綺麗に出来た大掃除 同
 - (真) 大鯛が濱で九錢の相場立ち 同
 - (同) 電話口説明をしてかけさせる 同
 - (同) 衣物着た息子を野良で叱つてゐ 同
 - (太) お天氣師葺の火から借始め 同
 - (尋) 著者の住所ナゼか本屋ば記入れず 同
 - (同) 差配所へ車夫急がせてヤアレ／＼ 同
 - (同) 洋杖で草を分けたら石碑が出 同
- 其時は神様程に醫者をほめ 梅村宇皎